

# 箴言

本書がかく称せられるのは、人々が身を修め、智慧を得、徳を積む上にいましめとなる、重要な英智の言葉がその中に収録してあるからである。またこれらの言葉が、「譬喻」とも称せられるのは、深い真理がしばしば象どりやたとえを以てその中に隠されているからにほかならない。そしてその原語は、一節の *Parabola (Napolema)* から出ているのである。

著者については、一節に記してある通りサロモンと/orするのに對し、別に有力な反証を挙げることはできない。但しそれは、彼が全部ではなく、重要な部分の作者であるといふ意味である。また前書きは、サロモンが箴言を既に現在の形で記したとも云つていよい。却つてその編纂が後代に行われたことは確實である。とは云え、現在の形になつたのが、西紀前二百年頃であることは間違いない。

## 第一章

箴言の目的——悪人に交わるを避け、智者の言を聽くべし。

一ダヴィードの子、イスラエルの王、サロモンの箴言。

二是れは智慧と規律と/orを知る為、三賢慮の言を曉る為、  
教の悟りと正義と判断と公平とを得ん為、四小さき者  
う正しい生き方の知識。規律とは正しい生き方の根本方針の実行。

に聰明を、<sup>2)</sup> 若き者に知識と了悟とを与えたためのものなり。

<sup>5)</sup> 之を聞かば、智慧ある者は更を智慧を増し、思慮ある者は

事に処する途<sup>3)</sup> を会得せん。

<sup>6)</sup> 彼箴言と、その説明と、智者

の言とその謎<sup>4)</sup> とに意を向くべし。 <sup>7)</sup> 主を畏るるは<sup>5)</sup> 智慧の

始なり。愚なる者は智慧と教とを輕んず。<sup>6)</sup> <sup>8)</sup> ハ我が子よ、汝の

父の羨けを受け、汝の母の教をおざりにするなれ。<sup>7)</sup> <sup>9)</sup> こ

れ、恩寵汝の頭に加えられ、飾鎖汝の頸にかけられんため

なり。<sup>8)</sup> <sup>10)</sup> わが子よ、罪人汝を啖<sup>9)</sup> すとも、之に従うなれ。

<sup>11)</sup> 彼等たとい「我等と共に来れ、我等待伏せして血を流さん、

罷<sup>12)</sup> を隠しあきて、罪なき者を故なきに陥れん、<sup>13)</sup> <sup>14)</sup> 一二冥府の如

く、彼を活きながら、玷なき者を穴<sup>15)</sup> に下る者の如く、呑ま

ん。<sup>16)</sup> 我等諸々の貴き物を獲、その奪いし物もて我等の家を

満さん。<sup>17)</sup> 我等と共に汝の箴を掛け、我等皆財布を同一にせ

2) ヘブレオ語「オルマ」。

単純の反対。但しここでは熟練の意。<sup>1)</sup> 船を操る術。

従つて他人を指導する技術

4) 智者の教訓の言は、まずその意味を考えなければならぬ点において謎に似ている。

5) 主を畏るるとは即ち真の神天主を恭々しく崇めるのこと。<sup>1)</sup> 詩一一〇・

一〇。集一・一六。

7) 天主に次いで父母。

8) 頸環は昔大いに珍重された飾りであつた。<sup>1)</sup> 筆者が説明のために挿入した言葉。<sup>10)</sup> 墓。

一五  
 ん。」<sup>(11)</sup>と云うとも、一五わが子よ、汝彼等と歩むなけれ、汝の足を  
 禁めて彼等の径に入るなかれ。一六蓋は彼等の足は悪に<sup>(12)</sup>はし<sup>(13)</sup>趨り、血を  
 流さん為に急げばなり。<sup>(12)</sup>一七されど翼あるものの眼前に網を張る  
 は空し。<sup>(13)</sup>一八彼等は己が血を流さんとて待伏せし、己が生命を害  
 せんとて詭計をなす。一九すべて貪慾なる者の途はかくの如くにし  
 て持主の生命を奪う。二〇智慧<sup>(14)</sup>は外にありて宣伝え、広場にあり  
 て声を擧げ、二群衆の先頭に立ちて叫び、市の門の入口にてその  
 言を出して云う、二三何時まで汝等小さき者、<sup>(15)</sup>小兒らしきを好み  
 愚なる者、己に害ある事を欲み、思慮なき者知識を憎むや。二四わ  
 が戒告を聽きて立帰れ、視よ、我わが靈を汝等に頤し、わが言を  
 汝等に示さん。二四我呼びしかど汝等拒み、我手を伸べしかど顧み  
 る者なく、<sup>(16)</sup>二五汝等わがすべての勸告を軽んじ、わが譴責を忽せ  
 になしたるにより、二六我も亦汝等の滅ぶる時に笑い、汝等の恐る

(11)仲間になれば、獲物の分配には平等の権利を与える。—(12)賽五九・七。—(13)しかし彼らの努力は無駄。—(14)作者はここで自分の教訓を具体化して感銘を深くするため、擬人法を使っている。これはパレスチナ地方の人々の具象的な考え方特に適当。罪の隠れたる誘惑に対し、智慧は明からさまに警告を発する。—(15)四節参照。  
 (16)賽六五・一二。六六  
 •四。耶七・一三。

二七

二八

二九

三〇

三一

三二

三三

三四

三五

三六

三七

三八

るもの汝等に來らん時に嘲らん。<sup>17)</sup> 三七俄に災厄襲い來り、滅亡暴風の如く押し寄せん時、患難困窮の汝等に臨まん折、三八人々<sup>18)</sup> 我を呼ぶべけれど、我聽かざらん、<sup>19)</sup> 彼等晨に起き出でんも我を見出すことなからん。三九彼等規律を憎み、主を畏るることを欲まず、<sup>20)</sup> またわが勸告を容れず、わがすべての戒告を蔑みたるによりて、<sup>21)</sup> 己が途の果を食し、己が策謀に飽かさるべし。三二小さき者の敵対<sup>20)</sup> は己を殺し、愚なる者の繁榮<sup>21)</sup> は己を滅ぼさん。三三されど我に聴く者は恐怖なくして安んじ、災厄の懸念なくして豊かに享けん。

## 第二章

### 智慧の利益と、それの教う悪

一わが子よ、汝もしわが言を容れ、わが誠命を汝の胸に藏め、<sup>22)</sup> かくて汝の耳を智慧に貸さんとせば、賢き慮りを知ることに汝の心を傾けよ。三蓋し汝もし智慧を呼び求め、

17) 詩二・四参照。

18) 二二節から始まつた愚者への談話は終つた

智慧はもはや彼らに對してではなく、彼らについて語る。—19) もはや正義を行う余地しか

智慧の忠告に対する彼らの反抗。

20) 智慧の誤れる安心。

21) 彼らの誤れる安心。

汝の心を賢き慮りに向け、四之を求むること金錢の如く、  
 之を掘り探すこと宝の如くせば、五主畏ることを悟り  
 天主を知ることを得ん。<sup>2)</sup> 六そは主智慧を賜い、賢慮と知識  
 とその御口より出ればなり。七彼は義しき者の幸福を保ち  
 直く歩む者を護り給わん。<sup>3)</sup> 八是は正義の徑を保ち、聖者の  
 途を守り給えばなり。九その時<sup>4)</sup>汝は正義と判断と公平と  
 あらゆる善き道を曉らん。一〇もし智慧汝の心に入り、知識  
 汝の靈魂を喜ばざば、二慎重汝を守り、賢慮汝を保ち、  
 三かくて汝悪しき道より、邪曲なる事を語る人より、救わ  
 るを得ん。三彼等は正しき途を棄てて暗き道を歩み、  
 四悪を行ひて樂しみ、惡しき事を喜ぶなり。五その道は曲  
 しりその歩みは恥を知らず。六汝また他の婦<sup>5)</sup>より、言を柔  
 しくして媚ぶる他所の婦より、救わるを得ん。七是はそ

**第二章** 一)ここで人々がアラビア(代下九・一四)やスペインのタルシス(代下九・二一)から金塊をサロモンの許に持参したこと想起するのも、興味がないことではあるまい。<sup>1)</sup> 二)熱心に智慧を、即ち敬虔な生き方を求める人は、智慧の最も貴重な結果である天主畏敬の念を得るであろう。<sup>2)</sup> 三)羅一一・一六。四)六一八節にあるものを、天主が与え給う時。<sup>3)</sup> 五)これで以て智慧の反対、即ち罪により天主畏敬の念から離れる事を示す。この愚かさは、罪が靈魂の天主に対する操を破るものである所から、姦婦に似ている。

三二一

わが子よ、わが法を忘れずして、汝の心にわが誠命を守れ、蓋は汝に長寿<sup>2)</sup>即ち生くる年と平安とを加うべければなり。三憐憫と眞実とを己より

## 第三章 善徳実踐の奨励。

一八　の若き時の相手<sup>6)</sup>を棄て、一八その天主との契約を忘れたる者、實にその家は死に傾き、その径は黄泉に至る。一九すべて彼女の許に入る者は再帰らず、且生命の径に達せざるなり。二〇これ<sup>7)</sup>汝をして善き道を歩ましめ、義しき者の径を守らしめん為なり。二一夫され、正しき者は地に住い、<sup>8)</sup>直き者は地に止まらん。二二されど惡しき者は地より亡ぼされ、義しからぬ者は地より取除かるべし。<sup>9)</sup>

一九

二〇　正当の配偶者を意味する優美な云い方<sup>7)</sup>以上いろいろ述べたのは、汝をして……ためである。一八約束の地カナアンは、最高の幸福の象徴。申二五・一五及びマテオ五・五参照。一九百一八

6) ヘブレオ語本では「わかき時の友」。  
7) 以上いろいろ述べたのは、汝をして……ためである。一八約束の地カナアンは、最高の幸福の象徴。申二五・一五及びマテオ五・五参照。一九百一八

・一七。

第三章 1) わが子よといやさしい呼びかけは、この短かい訓話のなかに三度繰り返されている。一一、二二、両節参照。一九長生きは旧約時代には天

四　五　六　七　八　九　一〇　一一　一二　一三　一四　一五　一六

離さず、之を汝の頸に巻き、<sup>3)</sup> 之を汝の心の板に錄せ、<sup>4)</sup> 四さらば汝  
 天主と人との前に恩寵と善き規律とを得ん。五汝の心を尽して主に  
 依り繋れ、己が思慮分別に賴るなかれ。<sup>6)</sup> 六汝いかなる道を取るとも  
 彼を思え、さらば彼汝の歩みを導き給わん。七自ら賢しとせず、天  
 主を畏れ、惡を離れよ、<sup>5)</sup> 八そは汝の身を健かにし、汝の骨を潤さ  
 ん。<sup>6)</sup> 九汝の所有物もて、<sup>7)</sup> 主を崇め、汝のあらゆる作物の初穂を彼に  
 献げよ、一〇然らば汝の納屋は充ち満ち、汝の酒搾は葡萄酒に溢れん。

一二　わが子よ、主の羨けを斥くるなかれ、また彼に懲しめらるる時に  
 気を落すなけれ。<sup>8)</sup> 二三夫れ、主はその愛する者を懲し、父の子に対  
 する如く、嘉し給うなり。一三智慧を見出し、思慮に溢るる人は幸福  
 なるかな。一四之を獲るは銀を買うに優り、その果は最良の純金に優  
 る。一五それはすべての財貨よりも貴し、あらゆる望ましき物も之に  
 は比ぶべくもあらず。一六その右手には長寿あり、その左手には富と

主の大なる恩恵と目  
 されていた。一三飾  
 りのようだ。一四こ  
 れらの徳は、ただう  
 わべばかりでなく心  
 の奥底にまで浸透さ  
 せなければならぬ  
 6) 天主の御捷を守る  
 5) 羅一二・一六。

と、健康にも益があ  
 ることは、経験の教  
 える所。一七奉納物  
 殊に十分の一税を以  
 て。創二八・二二。  
 利二七・三〇以下な  
 ど参照。一八來一二  
 •五。

榮譽えいよとあり。<sup>9)</sup> 一七その道は樂しき道にして、その徑はいづれも安全な  
 り。一八それは捉うる者ものには生命の樹きなり、<sup>10)</sup>之を保つ者は幸福なり。  
 一九主は智慧によりて地ちを据え、賢慮によりて天を固かどうし給えり。<sup>10)</sup> そ  
 の智慧によりて渊ふち忽ち現れ、露凝りて雲成る。<sup>11)</sup> 二一わが子よ、是等を  
 汝の眼より見失はずして、法と勸告とを守れ。<sup>おきてすすめ</sup> 二二さらばそは汝の靈魂  
 に生命となり、汝の頸に飾とならん。<sup>まも</sup> 二三然る時は汝安んじて汝の途  
 を歩むを得べく、汝の足蹠くことあらじ。<sup>12)</sup> 二四汝眠る時も恐怖なく、  
 休み得てその睡眠は快かるべし。二五さらば汝俄なる恐怖にも、また  
 悪しき者の力の汝を襲うにも、愕くことあらじ、<sup>おどろ</sup> 二六蓋は主汝の傍に在  
 して、汝の捕われざるよう、汝の足を守り給うべければなり。<sup>まも</sup> 二七善を  
 なし得る者の之をなすを妨ぐるなかれ、汝もし能うべくんば、自らも  
 亦善をなせ。<sup>14)</sup> 二八汝直ちに与え得る時、汝の友に向かい「行きてまた  
 来れ、明日我汝に与えん。」と云うなかれ。<sup>15)</sup> 二九汝の友汝を信賴せるに<sup>15)</sup>

<sup>9)</sup> 智慧を擬人化して、右手左手と考えている。<sup>10)</sup> 樂園にあつた生命の木をも暗にさしてあるらしい。創二・九、一七参照。

<sup>11)</sup> 昔の想像によれば、露は天から降りた。<sup>12)</sup> 本章三節及び本一・九参考。<sup>13)</sup> 不幸はいわば蹠く石のようなもの。<sup>14)</sup> ここでは富者の義務としてなすべき施したこと。<sup>15)</sup> ヘブレオ語本「人惡意

三〇

之に對して惡事を企図むなかれ。三〇人汝に何の惡をもなさざる時は、故なくして之と爭うなかれ。三一義しからざる人を羨むことなく、又その途を辿ることなかれ。<sup>16)</sup> 三二そは嘲る者はいすれも主の憎み給う所なればなり、されど直き者とは彼親しく語らい給う。<sup>17)</sup> 三三悪しき者の家には主の許より貧窮来る、<sup>18)</sup> されど義しき者の住居は祝せらるべし。<sup>19)</sup> 彼は嘲る者を嘲笑い、柔和なる者<sup>18)</sup>に恩寵を賜う。<sup>20)</sup> 三五智者は榮誉を得べし、されど愚者の高位に上るは恥辱に終るべし。

## 第四章

智慧を求めよとの父の子に対する勧め。

一子等よ、父の教を聽き、注意して賢慮を知るようにしてよ。<sup>21)</sup> 我汝等に善き贈物を与へん、わが法を棄つるなかれ。<sup>22)</sup> 実に我も亦わが父の子にして、わが母にとりては、纖弱<sup>1)</sup>獨子<sup>2)</sup>なりき。<sup>23)</sup> 彼、我に教えて云ひけるは、汝の心にわが言を受容れ、わが誠命を守れ、

三四  
三二  
三一三四四  
三四三  
三四二  
三四一

なく汝のもとに居るに」。<sup>24)</sup> —<sup>16)</sup> 詩三六・一。<sup>—17)</sup> ヘブレオ語本「主の呪い」。<sup>—18)</sup> ヘブレオ語本「謙遜なる者」。<sup>—19)</sup> 雅四・六。彼前五・五参照。

## 第四章

1)ダヴィード

もこの形容詞をその子サロモンに用いている。代上二九・一参照。<sup>—22)</sup> 独り子

さらば汝生くべし。<sup>五</sup>智慧を獲、賢慮を獲よ、之を忘れず、またわが口の言に背くなかれ。<sup>六</sup>これを棄つるなけれ、さらばそは汝を守らん、之を愛せよ、さらばそは汝を保たん。<sup>七</sup>智慧の最初は次の如し、智慧を獲よ、また汝の一切の所有物に代えても賢慮を獲よ。<sup>八</sup>これを捉えよ、さらばそは汝を高うせん、汝之を抱く時は之によりて榮誉を受けん。<sup>九</sup>そは汝の頭に恩寵を増し加え、汝に榮冠を被らしめん。<sup>10</sup>わが子よ、聽け、わが言を容れよ、これ汝の生くる年多くならんためなり。<sup>11</sup>我智慧の途を汝に示し、公正の径より汝を導かん。ニ汝之に入りなば、汝の歩みは窮屈ならず、走る時にも躡く物あらじ。<sup>12</sup>一規律<sup>6)</sup>を保ちて之を棄つるなけれ。之を守れ、そは汝の生命なればなり。<sup>13</sup>一不敬なる者の徑を喜ぶなけれ。また惡しき者の道を好むなけれ。一之を避けよ、之を通るなけれ、離れて之を棄てよ。<sup>14</sup>蓋し彼等は惡を為さざれば眠らず、人を躡かせざれば眠らざるなり。<sup>15</sup>彼等は惡のパンを食し、不義の葡萄

のように愛された。<sup>16</sup>本一・九参照。

<sup>4)</sup>本三・二とそ

の註参照。

<sup>5)</sup>本三・二三とその註参照。

<sup>6)</sup>本一・二とそ

の註参照。

の註参照。

<sup>7)</sup>智慧の教えを守れば、長生きの幸福が得られる。

酒を飲む。一八されど義人の径は、輝く光の如く、いよいよ出で

ていよいよ明るさを増し、終に真昼に至る。一九不敬なる者の道は

暗し、彼等はその倒れる處を知らず。二〇わが子よ、わが言を聽け、

わが語る所に汝の耳を傾けよ。二之一を汝の眼より離すながれ、汝

の心の中に留めおけ。二之はそを見出す者には生命にして、その

全身を健かならしむ。三警戒を反して汝の心を守れ、そは生命之

より出ればなり。四惡しき口を汝より去り、誹る唇を汝より

遠ざけよ。五汝の眼は直きを見、汝の眼瞼は汝の歩むに先立つべ

し。六汝の足に徑を備えよ、七さらば汝のすべての途は安定まら

ん。八右にも左にも偏るなけれ。九汝の足を悪より遠ざからしめ

よ。蓋し右にある途は主之を知り給う、されど左にあるは曲れり。

さりながら彼は汝の道筋を直からしめ、汝の途を安らかに進まし  
め給わん。

8) 悪事をするのが、睡眠や飲食のように、かれらの第二の天性になつてゐる。一九心は生

命の源。またマテオ一

五・一八一一九に聖主

が力説しておられるよ

うに、死の源もある。

一十正しい道に入れと

の意。一一右左に偏る

とは、人やその時の事

情など、殊にこの世の

幸不幸や友人敵などに

誤つた顧慮を払うとい

う意(聖ペルナルド)。

## 第五章

悪しき快樂とその機會とを避くべしとの勧め

一わが子よ、わが智慧に意を留め、わが賢慮に汝の耳を傾けよ、  
 らば汝思慮を保ち、汝の唇規律を守るを得ん。婦の手管に心を奪わ  
 るるなかれ、<sup>三</sup>夫れ娼婦の唇は滴る蜜の如く、その口は油よりも滑ら  
 かなり。<sup>四</sup>されどその終は苦艾の如く苦く、両刃の劍の如く銳し。<sup>1)</sup>  
 五その足は死に下り、その歩みは冥府に入る。<sup>六</sup>彼等は生命の徑を歩  
 まず、その足取は確ならずして知るべからず。<sup>七</sup>されば今、わが子よ、  
 我に聽け、わが口の言より離るるなかれ。<sup>八</sup>汝の途を彼女より遠ざけ  
 よ、その家の戸口に近寄るなかれ。<sup>九</sup>汝の誉を他人に、汝の年を酷き  
 者に与うるなかれ。<sup>一〇</sup>然らずば恐らくは他人汝の所有物に満たされ、  
 汝の労苦して得たるもの他人の家に帰せん。<sup>2)</sup>二かくて汝、最後に至  
 りて、汝の身汝の体を消耗し尽さん時、<sup>3)</sup>嘆きて云わん、<sup>一一</sup>「何故に

## 第五章

1) パレス

チナによく見られる「にがよもぎ」の苦さは蜜の甘さに、両刃の劍は油の癒す力に、それぞれ対照をなす。  
 2) 本二三・二一。  
 3) 放埒はこの上ない健康をも速かに破滅させる。

一三

我規律を厭い、わが心に譴責を容れず、<sup>一三</sup>我に教えし人々の声を聴かず、師に耳を傾けざりしそ。<sup>一四</sup>我は会衆と集会との中にて、殆どあらゆる惡に陥りたり。<sup>4)</sup>」と。一五汝己が水溜の水と己が井より湧く水とを飲め、<sup>5)</sup>一六汝の泉を外に引き、汝の水を広場にて分て。<sup>6)</sup>一七之を己独りのものとなせ、他人は汝と共に之を用うべからず。

の泉に祝福あらしめ、汝の若き日の妻<sup>7)</sup>と共に楽しめ。<sup>一八</sup>そは愛らしき牡鹿、優美しき小鹿なり、その胸は何時も汝を醉わしめよ、<sup>一九</sup>その愛によりて汝常に喜べかし。<sup>二〇</sup>わが子よ、汝何故に他の婦に迷わされ、外の者の胸に抱かるるや。<sup>二一</sup>主は人の途を轡し、そのすべての歩みを見守り給う。<sup>8)</sup>二二不敬なる者はその科の捕うる所となり、<sup>二三</sup>己が罪の繩もて縛めらる。彼は規律を容れざりしに由りて死すべく、その愚<sup>9)</sup>の多きによりて身を誤るべし。

<sup>4)</sup>会衆の面前で罪に定められ石打ちの刑に処せられなければならなかつた姦淫者によう。一五「水溜と井」は一八節でわかるように妻に対するたとえ。一六泉から豊かに広場へ湧き出る水とは、子孫の意味。一七汝が若い時に貰つた妻。<sup>8)</sup>百一四・一六。一九罪。

## 第六章

勤勉の忠告と放埒のいましめ

第六章  
の義務

二・三・四

一わが子よ、汝もし汝の友の保証人となり、他人と汝の手を組みたならば、汝の口の言によりて罠にかかり、自身の言いし所によりて捕えられしなり。三さればわが子よ、わが云う所を為して自らを救え、そは汝、他人の手に陥りたればなり。馳せ行きて、急ぎ汝の友を呼び起せ。四汝の眼をして眠らしめず、汝の眼瞼をして微睡ましむるなれ。五自らを救うこと、羚羊が手より遁るる如く、鳥が鳥さしの手より遁るる如くせよ。六怠惰なる者よ、蟻の許に行き、そのなす状眺めて、智慧を学べ。七そは導く者なく、教うる者なく、命ずる者なしと雖も、八己が為夏に糧を用意し、刈入期に食物を集む。九怠惰なる者はなお少しく眠り、なお少しく微睡み、なお少しく手を束ねて眠らんとするや。何時その睡眠より起き出でんとするや。一〇汝はかくては窮乏旅人の如く、貧困武人の如く、汝に来らん。されど汝もし勤勉

ならば、汝の刈入るるものは泉の如く來り、窮乏は汝の許より遠く逃げ去らん。二三変節したる人ひと、<sup>3)</sup>無益なる人は、虛偽の口もて歩み、一三眼もて合図し、足もて踏み、<sup>4)</sup>指もて語り、一四邪曲なる心もて惡事を企み、毎に不和の種を播く。一五かかる者ものにはその滅亡忽ち来りて、彼俄に打碎かるべく、最早救助の途みち<sup>5)</sup>なからん。一六主の憎み給うもの六つあり、なお第七のもの6)ありて、その御心に之を嫌い給う。一七即ち高ぶる眼、偽る舌、罪なき血を流す手、一八惡しき謀計をめぐらす心、惡に趨るに速き足、一九虚言を吐く偽証人、及び兄弟の間に不和の種を播く者、是なり。二〇わが子よ、汝の父の誠命を守り、汝の母の法を棄つるなれ。二一毎に之を汝の心に結び、汝の頸に巻け。二二是は汝の歩む時汝と共に歩み、汝の眠る時汝を守れかし、また汝目覺めなば之と語るべし、二三そは誠命は燈火、法は光、羈けの懲しめは生命の道にして、二四そは

3) 天主の御掟を棄てた  
 ような人。ヘブレオ本  
 「ペリアルの人」。4)  
 ヘブレオ本「足もて語  
 り」、足で合図する  
 こと。—5) 原文は non  
 habet ultro medicinam  
 「もはや薬あらざるべ  
 し」。—6) このかぞえ方  
 は、それによつてある  
 事の重要さを強調する  
 文学的な云い方。七は  
 完全数。されば下記を  
 すべて含む。—7) 本一  
 ・九。三・一二など参  
 照。

是等が汝を悪しき婦より、また他人の詔う舌より護らんため  
なり。汝の心その美を慕うべからず、その眞せに捕えらる  
るべからず。それ、娼婦の価は一塊のパンにだも若かざれど、  
人の妻は貴き生命を奪うなり。<sup>10)</sup> 人懷に火を隠して、その  
衣服を焼かざることを得んや。また炭火の上を歩みて、その  
足裏を焼かざることを得んや。かくの如く他人の妻の許に入  
る者も、之に触れては潔きことを得じ。人窃盜をなすとも、  
その科さまで大ならず、蓋は飢えし食慾を満たさんとて盜むに  
よりてなり。しかもなお、その捕えらるるや、七倍<sup>11)</sup>を返し、  
己が家の所有物を悉く付さざるべからず。されど姦淫を行  
う者は、その心の愚なる為に、己が命を亡し、<sup>12)</sup>醜聞と汚名と  
を自ら集め、その恥辱を雪ぐこと能わざるべし、<sup>13)</sup>そは夫嫉妬<sup>14)</sup>  
を憤怒りて、復讐<sup>15)</sup>の日に容赦せず、<sup>16)</sup>何人の願をも容ること  
無。

三一六

汝を悪に誘おうとする女。<sup>17)</sup>ヘブレオ本「そ  
のまつげもて」。まつげは網の糸に警えられる。

娼婦との交わりは貧困のもと、しかし姦通は死のもと。<sup>18)</sup>律法は通常奪い取つたものの二倍、時としては四倍五倍も返すことを命じた。出二二・一以下参照。この七倍とは恐らく最高額で、犯罪者をこの上なく厳しく罰することを示すもの。<sup>19)</sup>体面を汚された夫は姦夫を刑罰に処するよう裁判所に訴えるから。

なく、贖罪の為の數多の贈物をも受けざるべければなり。

## 第七章

智慧を愛するは誘惑に迷わされざらん為の最良の途。

一 わが子よ、わが言を守り、わが命令を汝の胸に蓄へよ。子よ、<sup>ニ</sup>わが誠命を守れ、さらば汝生きん。<sup>1)</sup> わが法を汝の眼の瞳の如くにし、<sup>2)</sup> <sup>三</sup> 瞳之を汝の指に結び、之を汝の心の板に錄せ。<sup>3)</sup> <sup>四</sup> 智慧に向かいて「汝はわが姉妹なり」と云い、聰明を汝の友と呼べ、<sup>五</sup> <sup>これ<sup>4)</sup></sup> その汝を他人の婦より、また甘き言をかくる他の婦より守らんためなり。<sup>六</sup> 我わが家の窓より、格子越に望みて、<sup>七</sup> 若き人々を見しが、一人の愚なる若者を認めた。八 彼は広場の隅を通り、彼女の家の道を歩みて近づき、<sup>九</sup> 日暮れて黄昏るるに及び、宵闇の暗きに紛れおりしに、<sup>一〇</sup> 視よ、娼婦の扮裝したる婦の、人の心を擄えんと手具脣引き、口多く言をかけつつ徘徊し

第七章 <sup>1)</sup> 本四。

四 参照。 <sup>—</sup> <sup>2)</sup> 瞳

は一度傷つくと、もう治らぬのが普通なのが、最も注意して大切にすべきもの。<sup>—</sup> <sup>3)</sup> 三・<sup>4)</sup> 汝

三 参照。 <sup>—</sup> <sup>4)</sup> 汝

が淫婦の誘惑に負けないため。

いたるが、彼を迎えたり。二この女は静なるに堪えず、家の中にその足を留めおく能わず、二或時は戸外にあり、或時は広場にあり、また或時は隅に近き所にて人を待伏せず。二この女その若者を執えて接吻し、厚顔にも媚び詔いて云いけるは、一四「我幸運の為に犠牲を誓いしが、今日わが誓を還せり。」<sup>5)</sup>一五されば我、汝を見んと欲し、汝を迎えるとて出で、ついに汝に逢いたり。一六我わが床を筵縁もて飾り、エジプトより来れる色美しき綵錦を之に敷き、一七わが臥床に没薬、蘆薈、桂皮を灌げり。一八來れ、我等胸と胸とを合せて酔い、日出するまで、憚れの抱擁を楽しもん。一九實に夫は家にあらず、遠き旅に出で立ちて、二〇財囊を身につけ持ち行けり。その家に帰るは満月の日<sup>7)</sup>に及びてならん。」と。二二かく彼女多くの言もて彼を籠絡し、その唇の媚び詔いもて彼を誘き行けり。二三彼直に之に従い、さながら屠所に引かるる牛の如く、戯るる小羊の如くにして、愚かにも足枷をかけられん為に引き行かるるを知ら

5) 和祭の犠牲の一部は家で喜びの御馳走の時食べた。一六) かねぶくろを持ちゆくとは、良人が長旅に出かけたといふこと。一九) 今は暗夜なので、もちろん新月の十二日ない月の頃。満月は月の十五日頃。

三三  
三三矢終にその肝<sup>きも</sup>を貫かん、そは恰も鳥の罠に向む

かいて急ぎ、しかも己<sup>おの</sup>が生命の危険に臨めるを知らざる如し。

二四されば今、わが子よ、我に聴き、わが言に

意<sup>こころ</sup>を留<sup>とど</sup>めよ。三五汝<sup>なんじ</sup>の心<sup>こころ</sup>を彼女<sup>かれおんな</sup>の途<sup>みち</sup>に誘<sup>おび</sup>き入れらるること

となかれ、またその徑<sup>こう</sup>に迷わざることなかれ。三六蓋<sup>ごめい</sup>は彼女<sup>かれおんな</sup>多くの人<sup>ひと</sup>を傷<sup>きずつ</sup>け倒<sup>たお</sup>したればなり、最強<sup>いとづ</sup>き者<sup>もの</sup>さ

え之<sup>これ</sup>に殺<sup>ころ</sup>されたり。三七彼女<sup>かれおんな</sup>の家<sup>いえ</sup>は冥府<sup>よみ</sup>に至<sup>いた</sup>る途<sup>みち</sup>にし

て、死の奥<sup>おく</sup>の間にまでも入り行<sup>ゆ</sup>くなり。10)

## 第八章

智慧教を説く——智慧の優れたること。

一智慧<sup>ちえい</sup>は呼<sup>よほ</sup>わり、聰明<sup>そうめい</sup>はその声<sup>こゑ</sup>を挙<sup>あ</sup>ぐるに非<sup>あら</sup>ずや。

二そは路傍<sup>みちばた</sup>の最高<sup>いとなか</sup>き処<sup>ところ</sup>の頂<sup>いただき</sup>、徑<sup>こみち</sup>の中に立ち、三市<sup>まち</sup>の

8) 肝臓<sup>きも</sup>はギリシャ人アラビア人口<sup>一</sup>マ人ペルシャ人には、情慾の源と考えられていた。—9) 娼婦ダリラに破滅させられたサムソンのことをそれとなくさしている。士一六・一一二一参照。—10) 本章は一方には娼婦に關係するなど眞の智慧と到底両立せぬこと、他方には罪はいずれも天主に対する操を破るもので眞の智慧に背くことを示す。

第八章 1) ここに自ら語る智慧とは人間にすべての知識を伝える永遠の

門もん、<sup>2)</sup> その戸口とぐちにありて語る、曰く、<sup>4)</sup>「人々よ、我汝等われなんじらに向かいて呼よばわり、わが声人の子等こえひとのこらに向かいて叫ぶ、<sup>5)</sup> 小さき者ちいよ、汝等聰明そうめいを曉さとれ、愚おろかなる者ものよ、汝等意なんじらニニロを留めよかし、<sup>6)</sup> 聽きけ、蓋そは我大われおおいなる事ことに就つきて語かたり、わが唇くちがるを開ひらきて正ただしき事を説かんとすればなり、<sup>7)</sup> 我が口くちは真実しんじつを心こころがけ、わが唇くちがるは惡あくを憎にくまん。<sup>8)</sup> 我が言ことばはすべて義ただし。その中うちには曲まがれる事ことや邪よこしまなる事こと、些いささかもあらず。是ただは曉さとる者ものには直なおく、知識ちしきを得うる者まがには正ただし。<sup>9)</sup> 金錢きんせんにあらずして、わが賤しつけを受けよ、黃金おうごんよりも寧むしろ教訓きょうくんを択えらべ。<sup>10)</sup> 蓋けだし智慧ちえはあらゆる貴とうとき物ものに弥優いやまさる。いかなる望のぞましき物ものも之これに比くらぶるを得えず。<sup>11)</sup> 我われ、即すなわち智慧ちえは、熟じゆく慮りょの中に住すみ、練ねりたる思想おもいの中にあり。<sup>12)</sup> 主おもを畏あるる念ねんは惡あくを憎にくむ。我われは驕傲おごりと高慢たかぶり、邪よこしまなる道みちと一枚舌にまいじたとを嫌きらう。<sup>13)</sup> 深慮しんりょと公正こうせいとはわものが有あるなり、洞察どうさつはわものが有あるなり、能力うからはわものが有あるなり。<sup>14)</sup> 我われによりて諸侯しょこうは世よを治おさめ、立法者りっぽうしゃは義ただしき事を定さだめ、<sup>15)</sup> 我われによりて諸侯しょこうは天てん

智慧ちえそのもの(二  
二一三一節)ばかりでなく、天主が人間に与え給さうた啓示けいしの内容なをもさすと解すべきである。<sup>1)</sup> 裁判及び公けの集会は門の所ところで開かれた。<sup>2)</sup> 裁判及び公けの集会は門の所ところで開かれた。<sup>3)</sup> いつでも天主を畏れる念ねんを以て、正義についてよく考えれば、智慧ちえがそばにいてくれる。<sup>4)</sup> これは賢慮の作用う。<sup>5)</sup> すべての為政者が權

下に号令し、権力者は正義を定む。一七我を愛する者はわが愛する所。朝早く目覚めて我を探す者は我に逢わん。一八富と榮とはわが許にあり、貴き財宝と正義とも亦然り。一九夫れ、わが結果は金や宝石にも、わが産物は精良なる銀にも、優るなり。二〇我是正義の道を歩み、公平の径の只中を行く、ニ是、我を愛する者を富ましめ、その宝庫を満たさん為なり。二二主は元始よりして、物を創造り給うに先立ち、その道の始めに当り我を有し給えり。二三我是永遠より、地の未だ造られざる前の古より立てられ、渊未だあらず、泉未だ湧き出でざるに、我既に孕り、二五山々未だその大なる威容を定められざるに、丘に先立ちて我生れたり。二六時に主は未だ地をも河をも地球の枢軸をも造り給わざりき。二七彼が天を備え給いし時、我はみ許に在り、彼が一定の法

を有するのは、自らによるのではなく、ただ永遠の智慧（羅一三・一）、即ち天主によつてのみ。それで彼らが正しく善い事を定めるのは、彼ら自身のわざではなく、天主の御照しの結果である、一六本三・一八に智慧を生命の木と記してある事を参考。一七「有す」とは、御父の中に御子の、御子の中に御父の、永遠に存在し給うことと意味する。ヘブレオ語本「主はそのみわざをなし給う前に、その道の始めとして我を立て給いき」。天主の第二位には、宇宙にある有形性、受動性、分離性、流动性などの不完全さがない。

則と境界とをもて渊を囲み給いし時、<sup>とき</sup>二八上に蒼穹を堅め、<sup>かぎり</sup>泉を据え給いし時、<sup>とき</sup>二九海の周囲にその限界を設け、<sup>もう</sup>水の為に法則を定めて、<sup>ため</sup>その境界を越えざらしめ給いし時、<sup>とき</sup>又地の基を据え給いし時、<sup>とき</sup>三〇我は彼の御許にありて一切を整え<sup>さ</sup>日毎に喜び、<sup>よろこび</sup>何時もその御前にて楽しみ、<sup>たのう</sup>三一地球の上にて楽しむ、<sup>たのう</sup>九わが喜悦は人の子等と共に在ることなり。10)三二されば今、<sup>いま</sup>子等よ、我に聽け、<sup>き</sup>わが道を守る者は幸福なるかな。三三規律に注意して賢くなれ、之を排斥くるなけれ。三四幸福なるか。な。我に聽き、<sup>き</sup>日毎わが戸口を見張り、<sup>しりぞ</sup>わが門の柱を守る人。<sup>ひと</sup>三五我を見出す者は生命を見出し、<sup>みいだ</sup>主より救濟を得ん。<sup>ひき</sup>13)されど我に対して罪を犯す者は己が靈魂を害うべし。凡て我を憎む者は死を愛するなり。

8) 一切は御子によつて造られた（約一・三）。その造り給うたものは、御自分の喜びのためで、御父は一日の仕事が終わる度に、そのすべてをよしと見給うた。——<sup>9)</sup>創造した物を喜ぶ。——<sup>10)</sup>天主の御姿に象どつて創造された人間を、御子が愛されたことは、御自ら人間の姿を取り、人の子と自称するを好まれ、罪のほかはあらゆる点で人間に似るよう努められたほどであつた。——<sup>11)</sup>王の居間を警護する衛兵のよう。——<sup>12)</sup>本三・一八。四。四。七・二参照。——<sup>13)</sup>約七・三七のキリストの御言など、及び賽一二・三参照。

## 第九章

智慧万人を己が饗筵に招く——愚の招き方は異なる

一 智慧ちえは己おのが為ために家いえを建たてて、七本ほん<sup>2)</sup>の柱はしらを研きり出し、  
 二 その犠牲いぎにえを屠はうり、葡萄酒ぶどうしゅを混まぜあわ合あわし、その食卓しょくたくを調ととのえ、<sup>3)</sup>  
 三 その婢つかひめを遣つかわして、市まちの城しろと、石垣いしがきとに、呼よばわらしめたり、  
 四 曰いわく、「人ひともし小しょうならば、<sup>4)</sup> わが許もとに来きたれ。」と。また智慧ちえなき者ものに曰いわく、  
 五 「來きりて、わがパンぱんを食くし、わが汝等なんじらの為ために混合まぜあわしたる葡萄酒ぶどうしゅを飲のめ。六 小兒こどもらしきを棄すてて生いき、聰明そうめいの途みちを歩あるめ。七 嘲あざける者ものに教おしうる者は己おのれに害がいをなし、  
 悪あしき者ものを責せむる者は己おのれに疵きずを生しようず。八 嘲あざける者ものを責せむる  
 ながれ、これ、彼かれが汝なんじを憎にくまざらんためなり。智慧ちえある者ものを責せめよ、さらば彼かれ智慧ちえを増ますべし。義おししき者ものに教おしえよ、さら

第九章 1) 智慧を自分のため家を建てた金持の婦人として述べている。—2) 七は完成の数。家とは教会のこと。七本の柱とは、七つの祕蹟、または聖靈の七つの賜物。—3) 富とは智慧を有している教師にある貴い宝をさす。饗應とはその教を人々に伝えること。—4) 本一・四参照。—5) 嘲弄者や不敬者に向かつて智慧を教えようとしても無益。—6) 殊に天主を蔑することに凝り固まつて嘲弄するような者。

一〇 ば彼速かに容れん。一〇 主畏るるは智慧の始なり。  
 一一 聖なる者7)を知るは聰明なり。一〇 夫れ、我により  
 て汝の日は多くなり、汝の生くる年は増し加わるべ  
 し。九 一二 汝もし智慧あらば、汝自身の為に然るなり。  
 また汝もし嘲8)る者たらば、汝獨り害を負わん。十  
 三愚にして騒9)がしく、誘惑に忙10)しくして何事をも知  
 らざる婦11) 三四 その家の戸口の席に就き、邑の高き  
 処に坐し、五道ゆく人や、旅する人を呼びて曰く、  
 六「小さき者よ、我に向かいて来れ。」と。また愚  
 なる者に曰く、七「盜12)みたる水は一入甘く、隠し  
 おきたるパンは更に味よし。」と。八彼は彼処に巨  
 人あり、彼女の客等13)は冥府の底にあることを知ら  
 ざるなり。

7) 三通りの解釈がある。聖なる人々を  
 知ること、聖なる物事を知ること、お  
 よび最も聖なる者ヤーゲエを知ること。  
 ト。一〇 詩一一〇・一〇。本一・七。  
 集一・一七。一〇 本三・二。一〇 人間  
 は善悪いずれにせよ、自分の行為の結  
 果を受けるから、つまり自分で自分の  
 決算をすることになる。一一 愚かさが  
 ばかな女に譬えてある。一一 愚も智慧  
 のよう人に饗應に招くが、その御馳  
 走は罪といふ禁断の食物。禁じられて  
 いることと、祕密にするということと  
 が、概して人を引きつけるのである。  
 一〇 「愚」の招待に応じた人々。

## 第十章

この章より第二十九章までは、賢愚、及び善悪に関する多くの真理と箴言とを載す。

### 第十章 ①喜びは母にもかかる、同

様に悩みは父にもかかる。ただ対句にするため別にしただけ。——②正しくしていれば、永遠の死からは必ず、この世の死からは時として、救われる（ノエとロトの話参照）——本

一一・四。——③天主は旧約ではユダ

ア人にこの世の宝を与えるとお約束になつたが、新約では人々を試みるため、そういうものをお与えにならぬ場合には、一段と高い宝、即ち靈的のそれを一層豊かに与え給う。——

④勤勉な人々。——⑤彼らの名は、嫌惡や恐怖の的。  
一 智慧ある子は父を喜ばす、されど愚なる子はその母の悩なり。⑥不義の財は何の益もなし、されど正義は死より救わん。⑦主は義しき者の靈魂を飢餓もて苦しめ給わず、⑧悪しき者の詭計を覆し給わん。⑨怠情なる手は貧窮を造り、強き者の手は富を贏得。虛欺に頼る者は風を牧い、飛び去る鳥を自ら追う。⑩刈入時に集まる者は賢き子なり。されど夏に斬する者は恥辱の子なり。⑪義人の頭には、主の祝福宿る、されど不義は悪人の口を掩い隠す。⑫義人の追憶には賞讃伴い、愚なる者は唇によりて身を漏ぼす。⑬直く歩む者は

○ 安んじて歩む、されどその道を曲ぐる者は露るべし。<sup>6)</sup> 一。眼もて  
 合図する者は苦しみを起し、唇の愚なる者は身も滅ぼさん。<sup>8)</sup>  
 二。義人の口は生命の水脈なり、悪人の口は不義を掩い隠す。<sup>9)</sup> 二。憎  
 惡は鬭争を起し、愛はすべての科を掩い隠す。<sup>9)</sup> 三。賢き者の唇に  
 は智慧あり、心なき者の背には鞭あり。四。智慧ある者は知識を隠す。<sup>10)</sup>  
 す。されど愚なる者の口はやもすれば恥辱の因となる。五。富める  
 者の財産はその力と恃む城市なり、貧しき者の懼るるはその  
 窮乏なり。六。義しき者の為す所は生命に至り、惡しき者<sup>12)</sup> の產  
 む所は罪に至る。七。規律を守る者は生命の道を行く、されど懲戒  
 を斥くる者は道を謬る。八。虚偽の唇は憎悪を隠し、罵言を出す者は  
 是愚者なり。九。多く語らば罪なきを得ず、されど己が唇を慎し  
 む者は最賢明なり。十。義しき者の舌は精選りたる銀の如し、され  
 ど惡しき者の心は価値なし。十一。義しき者の唇は多くの人を教う、

6) 偽り装つても、すぐ化けの皮が剥がれる。一。本六・一三参考。二。集二七・二五。  
 四。八。一。賢い人は時に応じて沈黙することを知つてゐるが、愚かな人は軽卒なお弁りをして恥をかく。二。富は正しく用いれば大いに役に立つ。十二。悪人は有り餘つてゐる物を、善をなすためでなく、罪や情慾の満足や貧者の圧迫のために使う。

されど無学なる者は心の貧しきままに死せん。三主の祝福は人をして  
 富ましむ、かかる人にはまた患難の伴うことなからん。三愚なる者は  
 怖も戯れの如くに悪を為す、されど用心深き人には智慧あり。四  
 き者にはその懼る所<sup>13)</sup> 来り、義しき者にはその望む所<sup>13)</sup> 与えらるべし。  
 五暴風の過ぎ去る如く、<sup>14)</sup> 悪しき者は在らずならん。されど義しき者  
 は永久に存する基礎の如し。六怠惰なる者の之を遣す者に対するは、<sup>15)</sup>  
 酔の歯に対する如く、煙の眼に対するが如し。七主を畏るるは齡を延  
 ぶれど、悪しき者の年は短縮めらるべし。八義しき者の待望むは喜悦  
 なり、されど悪しき者の希望は失われん。九主の道は、<sup>16)</sup> 直き者の力、  
 惡事を働く者には恐怖なり。十義しき者は永久に動搖することなし、  
 されど悪しき者は地に永住するを得ざるべし。<sup>17)</sup> 十一義しき者の口は智  
 慧を出さんとし、邪曲なる者の舌は亡びん。十二義しき者の唇は喜ば  
 るべき事を、<sup>18)</sup> 悪しき者の口は邪曲なる事を心がく。

13) 審判。—14) 不敬  
 なる者の天罰。—  
 15) 彼は使命を全然  
 もしくはちやんと  
 果たさない。—16)  
 主が御掟によつて  
 示しておいでにな  
 る道。—17) 約束の  
 地カナアン。詩三  
 六・二九参照。更  
 に深い意味では天  
 国。—18) 天主と人  
 とに。即ち正しい  
 こと。

## 第十ー章

智慧と恩き、善徳の益と惡の害

一 欺瞞の秤は主の憎み給う所、されど義しき分銅はその欲み給う  
 二 所なり。二 高慢のある所、そこには恥辱あり、謙遜のある所、そ  
 こには智慧あり。三 義しき者の直きは之を導き、惡しき者の邪  
 曲は之を荒廢ましめん。四 富の報復の日に益する所なし、され  
 ど正義は人を死より救うべし。五 直き者の義しきはその道を直な  
 らしめ、惡しき者はその惡しきによりて崩折れん。六 直き者の正  
 義は之を救ひ、惡しき者は己が詭計にかかるべし。七 惡しき者死  
 せば、最早その希望なく、八 思い煩う者、の期待も亦空しくなら  
 ん。八 義しき者は困窮より救われ、之に代りて惡しき者付さるべ  
 し。九 偽善者は口をもてその友を欺く、されど義人は知識によ  
 りて救われん。十 義しき者幸福なる時は市喜び、惡しき者亡ぶる

第十一章 1) ヘブレオ語本ではトウンマード。これは圓満無欠の意。  
 1) 富は生前に善用しなければならぬ。2) 富は生前に善用しなければならぬ。3)  
 本一〇・二。4) 悪人は死後何の希望もない。5) 自分の地位とか権力とかを求める人。6) 報復のため。  
 1) ヘブレオ語本「その隣人を亡ぼす」。7) 義人の祝福の言葉、敬虔な祈りや行い。

二時は讃称あるべし。一市は義人の祝福<sup>8)</sup>によりて高くせられ、悪人の口によりて覆滅<sup>9)</sup>ぼされん。二己が友<sup>9)</sup>を侮る<sup>10)</sup>者は心なき者なり、聰明なる人は沈黙<sup>11)</sup>を守る。三欺き歩む者は秘密を漏らす、されど心忠実なる者は、友に打明けられたる事を隠す。四治むる者のなき所<sup>12)</sup>、民倒れん、されど智謀多き所<sup>13)</sup>、安泰なり。五他人の為に<sup>11)</sup>保証をなす者は憂き目を見て苦しむ、されど畏に用心する者は安全ならん。六淑<sup>14)</sup>がなる婦は榮譽を得、強き者は富を得べし。七憐憫<sup>15)</sup>ある者は己が靈魂を益す、されど無慈悲なる者は近き者をさえ棄つ。八惡しき者の為す業は覺束なし、されど義を薄く者には確實なる報賞あり。九寛仁なるは生命に至り、悪を追う者は死に至る。十邪曲なる心は主に憎まるべし、その御好意は直く歩む者にあり。十一手に手を合すとも、十二惡しき者は罪なきを得ざるべし、されど義しき者の裔<sup>14)</sup>は救われん。十三美しけれども愚な

9) ヘブレオ語本「その隣人」。10) 侮辱する。  
 11) 必要もないのに、殊によくも知らない他人のために。本六・一参照。  
 12) 一ヘブレオ語本「情なき者は己が身をわざらわす」。すなわち天主の報復により苦しむ。13) 保証の印に手をさしのべる。14) ここでは義人の仲間の意。善人の群全体をさす。

三〇 婦は、黄金の環の豚の鼻にある如し。<sup>15)</sup> 三義人の希望するは悉く善なり、悪人の期待するは震怒のみ。<sup>16)</sup> 己が所有物を分け与えて、却つて富を増す者あり、己が物に非るを奪い取りて、却つて常に窮乏に困しむ者あり。他を祝する者は肥え太るべく、他を酔わす者は己も亦酔わざるべし。<sup>17)</sup> 穀物を隠しおく者は民に呪われん、されど之を売る者の頭には祝福あらん。<sup>18)</sup> 善を求むる者はよく曉に起き出ず、<sup>19)</sup> されど惡を図る者はそれによりて圧し拉がるべし。己が富を持みとする者は倒れん、されど義しき者は綠葉の如く繁り榮えん。己が家を擾ぶ者は風を得べく、愚なる者は賢き者の僕となるべし。義しき者の果は生命の樹なり、人心を收

<sup>15)</sup> ヘブレオ語「ネゼム」。東国の女が鼻隔に通している鼻環。創二四・二二参照。—<sup>16)</sup> 不敬なる者に対して発すべき天主の御激怒。—<sup>17)</sup> 人に惠む者。

<sup>18)</sup> この旧約の箴言は、キリスト教の修徳上で承認されている、慈善の業や施しをする人は貧しくならないといふことを云いあらわしている。徒二〇・三五参照。—<sup>19)</sup> 穷乏の時に、困っている人に穀物をやらずにいるのは、恐ろしい大罪である（聖アンブロジオ）。—<sup>20)</sup> 惡夢に悩まされることなく、安眠して。—<sup>21)</sup> 喧嘩や争い。—<sup>22)</sup> 暗に創二・九をきす。本三・一八参照。

攬うる者は賢し。三義人三義人だになお世に於いて報酬むくいを受くとせば、<sup>23)</sup>まして悪人と罪人つみびととにありては如何いかにぞや。

## 第十二章

智者と愚者との行為の対照

一 規律きりつを愛する者は知識ちしきを愛す、懲戒こらしめを厭う者は愚なり。  
二 善良なる人は主より恩寵おんちょうを蒙らん、されど己が思慮しりょを恃む者は天主てんしゅを蔑して振舞う。  
三 人は不敬によりて堅固なるを得ず、義しき者の根は搖ぐことなからん。  
四 勤勉なる婦はその夫の冠かんむりなり、<sup>1)</sup>恥ずべき事を行う婦はかれの骨ほねを腐くさらすものなり。  
五 義人の思う所は義を目ざし、悪人の図はる所は欺瞞きまんなり。  
六 悪しき者の言は他を待伏して血ながを流さんとし、義しき者の口は之を救わん。  
七 悪しき輩やからふに触れよ、<sup>2)</sup>さらば彼等あらずなるべし。されど義しき者の家は存せん。  
八 人はその知識によりて知られん、されど空しくして愚な

## 第十二章

1) 冠は榮譽の象徴。 2) 殺されないようになる者は瞬く間に。 3) 不敬なる者にはひまに見えるくなる。

<sup>23)</sup>義人ですらその過ちゆえに罰せられずに済まぬなら、悪人はどうして懲罰を免れ得るなどと夢想できようか(聖アンブロジオ)。彼前四・一八参照。

一〇 九  
一〇 九  
一〇 九  
一一 一〇  
一二 一〇  
一三 一〇  
一四 一〇  
一五 一〇  
一六 一〇  
一七 一〇  
一八 一〇

る者は軽侮を招かん。貧しくして自給自足する者は見栄を飾りてパンに窮する者に優る。<sup>4)</sup> 義しき者はその駄獣の心を知る、されど惡しき者の心腸は殘忍なり。二 己が畠地を耕す者はパンに飽かん、されど怠惰を求むる者は最も愚なり。好みて酒宴に時を過す者は、己が住居に恥辱を遺す。三 不敬なる者の望むは悪人を護る砦なり、<sup>5)</sup> されど義しき者の根は伸び行くべし。

一三 唇の罪によりて滅亡は悪人に近づき来る、されど義人は窮地より遁るを得ん。<sup>6)</sup> 一四 いづれの人もその口の果によりて善き事に満たざるべく、<sup>7)</sup> その手の為せる所に循いて自身に報を受くべし。一五 愚なる者の途はその目之を正しとす、<sup>8)</sup> されど賢き者は忠告に耳を傾く。一六 愚なる者は直に憤怒を露す、されど不興を包み隠す者は賢し。一七 己が知れる所を語る者は正義を述ぶ、されど偽る者は偽証人なり。一八 約束して、後良心の劍もて

④集一〇・三〇。 ⑤惡人は互に奪い合うことしか考えない。彼らの間には和合といふことがない。利己心がその仲間の内に絶間のない争いを起こすのである。一六) 七十人訳ではここに、一文が附加されている。一七) 善い結果が生じて幸福になる。一八) 自分をいつも正しいと思つてゐる者は愚かである。一九) 自分が本當と思つてゐること。

刺さるる如くなる者あり、<sup>10)</sup> されど賢き者の舌はいやす。一九 真理の  
 唇は永久に確なるべし、されど輕卒に証人となる者は偽の舌を構  
 う。二〇 悪事を企む者の心には欺瞞あり、されど和睦を図る者には喜  
 悅隨伴う。二一 義人は何事身に起るとも悲しまず、<sup>11)</sup> されど悪人は  
 祸に満たさるべし。二二 虚偽の唇は主の憎み給う所なり、されど真  
 実を行う者はその御意に適う。二三 賢き人は知れる事をも隠す、智慧  
 なき者の心はその愚をあらはす。<sup>14)</sup> 二四 強き者の<sup>12)</sup> 手は主君となるべし、  
 されど怠る者は臣下となりて貢を納めん。<sup>13)</sup> 二五 人の心にある悲は  
 之を沈ましめ、善き言は之を楽しましめん。二六 友の為に己が損失を  
 顧みざる者は義人なり、されど悪しき者の途は彼等を迷わしめん。  
 二七 欺く者は利益を得ざるべく、人<sup>14)</sup> の有てるものは黄金に値すべし。  
 二八 正義の徑には生命あり、されど横道は死に至る。

10) 何か約束してから、すぐこれは果たすことができないと氣づく人が少なくない。11) 義人は何かつらい事に出会つても、それはその心を淨化するのに役立つから。12) 勤勉な者。13) 怠け者は間もなくなんらかの形で、敢闘する活動家の下に立たねばならぬ。14) 義人。

## 善人と悪人との運命

## 第十三章

一 賢き子は父の教を聴く、<sup>1)</sup> されど嘲る者は譴責めらるる時耳を傾け  
 す。二人はその口の果によりて善き物に飽かさる、されど邪曲なる者  
 の心は義しからず。<sup>2)</sup> 三己が口を守る者はその靈魂を守る、されど語る  
 に当りて慎しまざる者は禍に逢わん。<sup>4)</sup> 四怠惰なる者は、意を定むれど  
 も定めず、されど働く者の心は豊かなるべし。<sup>5)</sup> 五義人は虚偽の言を厭  
 わん、されど悪人は他に恥辱を与える、また自らも恥辱を受けん。<sup>6)</sup> 六義  
 は罪なき者の途を守る、されど惡は罪人を倒す。<sup>7)</sup> 富めるが如くにして  
 て、何物をも有たざる者あり、また貧しきが如くにして大いに富める  
 者あり。<sup>8)</sup> 八人の生命を贖うはその富なり、<sup>3)</sup> されど貧しき者は脅威を  
 受くべくもあらず。<sup>9)</sup> 義人の光<sup>4)</sup> は歓喜を与う、されど悪人の燈火は  
 消ざるべし。<sup>10)</sup> 高ぶる者の間には常に争いあり、されど一切を諦りて

## 第十三章 1) 父の

教がどうであつた  
 かを、生活によつ  
 て示す。——2) 誰も  
 みな自分の言葉の  
 結果をわが身に受  
 けねばならぬ。——  
 3) 多分裁きの廷に  
 出ることか、強盜  
 に襲われることを  
 云つてゐるのであ  
 るう。——4) 光は幸  
 福の象徴。

行う者は智慧の指導を得るなり。二俄に得たる財は減少せん、されど手

5) 箴言に度々出  
てくる譬え。一

もて少しずつ集めたるものは増加せん。三希望のかなうこと遅るるは心

6) ヘプレオ語本  
は「言」即ち天

を苦しめ、願う所の来るは生命の樹<sup>5)</sup>なり。三何事か<sup>6)</sup>を誹る者は自ら

主の御言。一七

後日に障碍を遺す、されど誠命を畏るる者は安らかに歩むを得ん。欺く

遣した人と、使  
に行つた先の人

者は道を謬りて罪に陥る、されど義しき者は憐憫ありて、憐憫を受くべ

と満足を与える、よく注意し

し。四智慧ある者の法は生命の泉にして、死の滅亡を免れしむ。五善き

と使命を果たす

教は恩寵を与へん、軽んずる者の途には陥<sup>7)</sup>あり。六賢き者は慮りて一

から。一八善徳

切を行う、されど愚なる者はその愚を顧す。七惡しき者の使者は禍に

や名譽や財産が

陥る、されど忠実なる使者は幸あらしめん。八規律を棄つる者には貧窮

連綿と伝わつて

と恥辱と至る、されど譴責に従う者は榮誉を得べし。九願望かなわば心

いる家。一

喜ぶ、愚なる者は惡を避くる人々を厭う。十賢き人と共に歩む者は賢く

から。一九罪人

ならん、愚なる者の友は彼等に似たる者とならん。三罪人は禍の追う所

となり、義人には善の報あるべし。ニ善人は相続者たる子や孫を遺す、

三三五

となり、義人には善の報あるべし。ニ善人は相続者たる子や孫を遺す、

三三五

二三

二四

二五

されど罪人の財産は義人の為に保留せらる。二三父祖の耕地には食物多し、されど他人の為に之を集むるは正当ならず。四鞭を答む者はその子を憎むなり、子を愛する者は切りに之を懲戒す。五義しき者は食すれば心に満足す、されど惡しき者の腹は飽くことを知らず。

9) 父祖から受け伝えたきさやかな田畠を耕す貧者は、祝福を蒙るだろう。しかし不当な富を積んだ者は、いつかその財産を他人に渡きなければならなくなるだるう(二二節)。一〇) 本二三・一三。

## 第十四章

社会における賢と愚

一婦の賢きは己が家を建て、愚なるは建てられたるものをおも己が手もて毀す。二正しき道を歩み天主を畏るる者は、破廉恥なる道を行く者に侮らる。三愚なる者の口には高慢の鞭あり、されど賢き者の唇は己を守る。四牛のあらざる所、秣槽空し、されど生ずる物の多き所、牛の力顯る。

第十四章 1)百一二・四。—2)

本一三・三参照。無駄話は屢々高慢な者にとつていろいろな損害のもととなる。—3)この場合、秣槽を満たすために心配する必要はないが、耕作が出来ない

<sup>五</sup> 忠実なる。証人は偽らず、されど偽証人は虚言を吐く。<sup>六</sup> 嘲笑する者は智慧を求むるも之を得ず、聰明なる者の知識を得るは容易し。<sup>七</sup> 行きて愚なる人に向かい見よ、彼は聰明の唇を知らざるなり。<sup>八</sup> 賢き者の智慧は己が道を悟るにあり、愚なる者の淺慮は道を謬る。<sup>九</sup> 愚なる者は罪を悔らん、義しき者の中には恩寵宿る。<sup>一〇</sup> 己が靈魂の苦惱を知る心、その喜悦は他人の関りしる所に非ず。<sup>一一</sup> 悪しき者の家は滅ぼされん、されど義しき者の中の幕屋は榮ゆべし。<sup>一二</sup> 人に義しと見ゆる道あり、されどその最終は死に至る。<sup>一三</sup> 笑いにも苦惱混じらん、歡樂極まりて哀傷生ず。<sup>一四</sup> 愚なる者は己が道に飽かん、善き人は之に優るべし。<sup>一五</sup> 悪気なき者はいかなる言をも信ず、賢き者はその歩みに注意す。邪智ある子には善き事絶えてあらじ、されど賢き僕にありては、行う所幸に運び、その道直くせられん。賢き者は

いから、田畠に物が生じない。それで穀倉も林槽同様空のままである。<sup>一</sup> ④ヘブレオ語「ラーソン」天主の御眷顧。<sup>二</sup> 喜びを共にする者は容易に見あたるが、憂を共にする者はなかなかない。<sup>三</sup> 悲しみのまじらぬ喜びはない。<sup>四</sup> 愚者がそのやり方で得るよりも多くの楽しみを、敬虔な人は正義のうちに見出す。<sup>五</sup> この一節はヘブレオ語本及びヴルガタの古い写本にはない。

一七 懼れて惡を避け、愚なる者は之を意に介せずして安んず。一七 短氣なる人は  
 愚なる事を行い、狡猾なる人は憎惡を受く。一八 小さき者は愚なる所を有  
 ち、賢き者は知識を待ち望まん。一九 惡人は善人の前に、不信なる輩は義し  
 き者の門前に、平伏すべし。二〇 貧しき者はその近親者にまでも厭われん、  
 されど富める者の友は多し。二一 己が近親者を蔑む人は罪あり、されど貧し  
 き者を憐む人は幸福ならん<sup>10)</sup>。二二 主を信する人は憐憫を好む。二三 惡事を働く者は  
 は道を謬る、憐憫と眞実とは幸を備う。二四 いかなる働きによりても豊饒に  
 ならん<sup>11)</sup>。されど言多き所には、屢々貧窮あり。二五 智慧ある者の冠はその富な  
 り、愚なる者の愚は淺慮なり。二六 信実なる証人は人の生命を救う、狡猾な  
 る者は虚言を吐く。二七 主を畏るるは生命の泉なり、之によりて死の滅亡を免るべ  
 し。二八 王者の威は民の多きにあり、民の少きは諸侯の恥辱なり。二九 勘え忍  
 ぶ者は多くの賢慮に導かる、されど短氣なる者はその愚さを累ぬ。三〇 心の

9) 善い事が結局不正に勝つという約束。  
 10) 憐憫は地獄の門前に立ちはだかり、憐みを好む者を一人もそこへ入らせぬ（聖アウグスチノ）。——溢れるほど豊かな報い。——主を畏敬する人の子等。

三一

健全なる<sup>13)</sup>は体の生命なり、嫉妬は骨を腐らすものなり。三一貧し

き人を虜ぐる者はその創造主を侮辱す、されど貧しき人を憐む者は彼を崇むるなり。<sup>14)</sup>三二悪しき者はその惡しきに由りて追い出されん、されど義しき者は死に臨みても希望あり。三三聰明なる者の心には智慧宿り、凡て無知なる者に教うべし。三四正義は国を高く

す、されど罪は民を悲惨ならしむ。三五賢き僕は王に嘉せられ、無益なる者はその忿怒を受けん。

## 第十五章

智慧は罪を避くる途を教う。

一柔和なる答は忿怒を挫き、荒き言は憤怒を招く。二智慧ある者の舌は知識を飾り、愚なる者の口は愚かを吐く。三主の御眼は到る処にて善人をも悪人をも歛す。四穏和なる舌は生命の樹<sup>2)</sup>なり、されど慎しみなき舌は氣を挫けしむ。五愚なる者はその父の嫌け

五 四 三 二一

第十五章 1)本二五・

一五。—<sup>2)</sup>幸福と祝福とのもと。

<sup>13)</sup>心の健かなるとは、ここでは嫉妬に相対し、従つて他人の事をわが事のように思う憐を意味する。本章二節参照。—<sup>14)</sup>本一七五。

を嗤う、されど譴責を守る者は賢くなるべし。義の溢るる所には大なる力あり、されど惡しき者の謀計は根より拔かれん。  
六 義しき者の家は甚だ堅牢し、されど惡しき者の利得には煩累3)  
 あり。セ賢き者の唇は知識を拠む、愚なる者の心は然らざる  
 べし。八惡しき者の犠牲は主に厭われ、義しき者の誓願は彼に  
 嘉せらる。九惡しき者の道は主に厭われ、義に遵う者は彼に  
 愛せらる。一〇生命の道を棄つる者には厳しき懲戒あり、譴責を  
 厫う者は死すべし。一一冥府と滅亡と6)は主の御前にあり、況  
 して人の子等の心はいかならん。一二腐敗したる者は懲戒す者を  
 好まず、また智慧ある者の許にも行かじ。一三心楽しければ顔色  
 も晴れやかになり、心憂うる時には氣も沈まん。一四賢き者の  
 心は教を求め、愚なる者の口は無知を食とす。一五貧しき者の日  
 は悉く悪しく、心安らかなる8)は絶間なき饗筵の如し。一六も

3) 例えば寡婦孤児たちの涙、欺かれた者の嘆きなど。一四内に正しい心がけがなければ、うわべだけで天主を崇めても価値がない。一本二二・二一七。集三四・二一。一五永遠の死。また屢々早死。一六ヘ・プレオ語本「セオールとアバッドーンと」死者の住處「よみ」を表わす二つの同義語。すなわち最も知られぬ所。一七・二二。一八困つていてえ。

一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九  
 つ所少くして主を畏るは、資財多くして満足せざるに優る。一七愛もて  
 野菜をすすめらるは、憎惡もて肥えたる犠をすすめらるに優る。一八怒り  
 易き人は争を起し、堪え忍ぶ者は起れる争をも鎮む。一九怠惰なる者の途は  
 茨の生垣の如し、義しき者の途には躡かしむる物なし。二〇賢き子はその父を  
 喜ばし、愚なる人はその母を侮る。二一愚なる者には愚なる事が喜悦なり、さ  
 れど賢き人はその歩みを直くす。二二計画議ることなくば則ち破る、されど議  
 る者多き時は成就す。二三人は已が口の言を喜べど、時を得たる言こそ最も善  
 けれ。二四賢き者の生命の径は下なる冥府を離れしめんとて上に向かう。二五主  
 は高ぶる者の家を毀ち、寡婦の境界を固うし給わん。二六悪しき思念は主に  
 厲われ、潔き言は彼に最も美しと確認めらるべし。二七利慾に従う者はその家  
 を煩わす、されど賄賂を憎む者は生きん。憐憫と信実とによりて罪淨められ、  
 主を畏るるによりて何人も悪を離る。二八義人の心は従うことを考え、悪人の  
 の口は悪しきことを吐きちらす。二九主は悪しき者より遠ざかり、義しき者の

9) ヘブレ  
 オ語本  
 「多くの宝もちて煩いあるにまさる。」—10  
 境界を移して他人の土地を奪うは、悪人の暴虐の一例。—11  
 本一六・六。

三〇 祈祷を聽容れ給わん。三〇眼の光<sup>12)</sup>は心を喜ばし、好き噂は骨を肥やす。<sup>13)</sup>人生の<sup>14)</sup>譴責を聞く耳は賢き者の間に留まるべし。<sup>13)</sup>規律を棄つる者は己が靈魂を軽んず、されど<sup>13)</sup>譴責を容るる者は心ある者なり。<sup>13)</sup>主を畏るることは智慧の教訓<sup>14)</sup>なり、謙遜は榮譽に先立つ。

## 第十六章

### 人間の智慧と天主の御摺理

一心に準備するは人のなす所にして、舌を御するは主のなし給う所なり。<sup>1)</sup>二人の途は悉くその眼に明白なり、されど主は心を考量り給う。<sup>2)</sup>汝の所為を主の御前に露せ、さらば汝の思念は直くならん。<sup>3)</sup>主は一切の物を御自分の為に、悪人をも禍の日<sup>3)</sup>の為に、創造り給えり。<sup>4)</sup>高ぶる者は何れも主に憎まれ、手に手を合すとも罪なきを得ざるべし。善き途の始は義を行うにあり、しかして是は犠牲を獻ぐるよりも主に嘉納せらるるなり。<sup>5)</sup>憐憫と信実により

<sup>12)</sup>励ましてくれるような温かいまなざし。<sup>13)</sup>幸福は健康に益する。<sup>14)</sup>生活のためになる。

第十六章 ①本章九節。—②内部の意向。  
一本二〇・二四。—  
③この世またはあの世の報いの日。<sup>4)</sup>  
本一一・一二参照。

て不義贖われ、主を畏るるによりて人悪を離る。<sup>5)</sup> 七 主は人の途を  
 嘉し給う時、その人の敵をも和睦に向かわしめ給わん。八 正しくして  
 得たる僅少のものは、不正にして得たる多くの收入に優る。九 人  
 の心は己が途を定む、されどその歩みを導き給うは主なり。<sup>6)</sup> 一〇 王  
 の唇には天主の御言あり、その口審判に当りて謬らざるべし。二  
 と分銅とは主の定め給う所にして、袋の中の分銅石もすべてその造  
 り給いしものなり。<sup>7)</sup> 一一 惡を行う者は王に憎まる、そはその位正義  
 によりて確立せるが故なり。一二 義しき唇は王の嘉する所なり、直  
 ことを語る者は愛せらるべし。三四 王の忿怒は死の使者なり、<sup>8)</sup> 智慧  
 ある人は之を宥めん。一五 王の顔晴れやかなる時には生命あり、その  
 寛仁は過ぎ雨の如し。<sup>9)</sup> 一六 智慧を己が有とせよ、そは黄金に優れば  
 なり、聰明を獲よ、そは白銀よりも貴ければなり。一七 義人の径は悪  
 を離る、己が靈魂を護る者は己が途を慎む。一八 高慢は没落の前兆に

5) 本一五・二七。一  
 6) 本章一節。一  
 7) 商人は秤の分銅として使う石を袋に入れて持ち歩いた。一八 王は生死を定める権力をもつていた。一九 三月四月に「おそい雨」が降らないと、パレスチナでこの雨季の後に始まる乾季に穀物が十分に伸びられないので凶作になる。昔はこれで人々飢餓のもととなつた。

して、滅亡の前には意氣揚るなり。一九有利なる者と共に蔑まるは傲慢なる者と共に分捕物を分つに優る。二〇事に巧みなる者は成功を得べく、主に依頼む者は至福なるべし。二一心の賢き者は聰明なりと呼ばれん、言柔しき者は得る所更に大ならん。<sup>10)</sup>二二了悟は之を有つものにとりて生命の泉<sup>11)</sup>なり、愚なる者の教は愚なり。二三智慧ある者的心はその口に教え、その唇に優美を添うべし。二四よく諳いたる言は生蜜なり、靈魂に甘く、骨を健にする。二五人に直しと見ゆる道あり、されどその最終は死に至る。<sup>13)</sup>二六苦労する者の心は己が身の為に苦労す、そはその口彼に之を強うればなり。<sup>14)</sup>二七悪しき人は悪を掘り出す、その唇には燃ゆる火あり。二八邪曲なる人は争を起し、言多き者は諸侯を離れしむ。<sup>5)</sup>二九義しからざる人はその友を誘い、善からぬ道に之を導く。三十眼を据えたる者は悪事を企み、その唇を噛みて悪を貫徹く。<sup>16)</sup>三一義しき途を踏みて迎えたる老齡は榮譽の

10) ヘブレオ語本「教に役立つ」—11) 本一・三〇参照。—12) 本一五・一三。一七・二二。—13) 本一四・一二。—14) 腹がへるといやでも動かねばならぬ。—15) —ヘブルオ語本「親友を離れしむ」。—16) かようと思ふ者は、またこれを行し易い。実際にかれはすでに罪を犯しているのである。

三二  
三三

冠なり。<sup>17)</sup> 勸忍する者は剛勇の人に優り、己が心を制御する者は城市を奪取る者に優る。<sup>18)</sup> 篋は懷に入れおく、されど之は主によりて定めらるるなり。

## 第十七章

智慧の利、愚の不利を説く譬喻

一口の乾けるパンありて喜ぶは、家に犠牲の畜満ちて争うに優る。賢き僕は愚なる子を治め、その兄弟の中にはりて遺産を分ち取らん。<sup>2)</sup> 白銀が火に、黃金が炉に驗さるる如く、心は主之を驗し給う。<sup>3)</sup> 悪しき者は義しからぬ舌に遵い、欺く者は虚偽の唇に耳を傾く。<sup>4)</sup> 貧しき者を輕蔑するは、その創造主を侮辱するなり、他人の滅亡を喜ぶは罪なきこと能わざるべし。<sup>5)</sup> 老人の冠は孫なり、子の榮誉はその父なり。よく整いたる

17) 長生きは御撻を守つた報い。—  
18) 懐のふくらんだ所は物を入れるのに用い、籋を入れるにも使つた。

## 第十七章

1) 和祭の牲の中からは少しづか献げなかつた。その大部分は盛んな饗宴を開いて食べ尽くしたものである。—2) 下僕や奴隸でも賢ければいかに有力な地位に昇り得るか、それはエリエゼル（創一五・二。二四・二）やヨゼフ（創一〇・二八。—<sup>3)</sup> 本一四・三一。

言は愚者にふさわず、虚偽の唇は侯にふさわず。八待つ者の望む

所は最美しき宝石なり、彼は何方に向かうとも賢明に振舞う。4)

九科を隠す者は友情を求め、他人の事を繰返し云う者は友を離れ

しむ。一〇一度の譴責が賢き者を益するは、百度の鞭打が愚なる者

を益するより大なり。一一惡しき者は常に争を求む、されど彼には

残忍なる使者<sup>5)</sup>遣されん。一二口が愚を恃める愚者に逢うよりも、

寧ろ仔を奪われし牝熊に逢うことよけれ。一三善に報ゆるに惡を以

てする者は、禍その家より離れざるべし。一四水を流す者は争の

原因なり、五されど彼は恥辱を受けざる内に係争を棄つ。一五惡しき

者を義とする人、及び義しき者を悪しとする人は共に天主の憎

み給う所なり。一六智慧は買うこと能わざるものなるに、愚者に

富ありとて何の益があらん。己が家を高くする者は倒壊を招き、学

ぶを忌避う者は不幸に陥る。一七友たる者は如何なる時にも愛す、

4) 偉い人や裁き人への進物は、注意して贈らなければならない。5)

一一説では天主御自身が遣し給う死の天使。一説では王から罪人を罰せよとの命を受けた役人。一六羅一二・一七。撒前五・一五。彼

前三・九。一七この喻

は、よく町々の近くに設けてあつた大貯水池から採つたもの。一八賽五・二三。

兄弟は患難の時に証せらる。⑨一八愚なる人はその友の為に保証をなして手を拍つべし。<sup>10)</sup> 一九不和を図る者は争好み、己が門を高くする者は倒壊を招く。二〇心の邪曲なる者は争好み、己が門を高くする者は倒壊を招く。二一愚者には争好み、己が門を高くする者は倒壊を招く。二二愚者には争好み、己が門を高くする者は倒壊を招く。二三愚者には争好み、己が門を高くする者は倒壊を招く。二四愚者には争好み、己が門を高くする者は倒壊を招く。二五愚者には争好み、己が門を高くする者は倒壊を招く。二六愚者には争好み、己が門を高くする者は倒壊を招く。二七愚者には争好み、己が門を高くする者は倒壘を招く。二八愚者には争好み、己が門を高くする者は倒壘を招く。

⑨) ヘブレオ語本「かれはなやみの時に兄弟となるため生まる」。⑩) 聖書は軽卒に保証の責任を負うことを、しきりに且つねんごろに警告する。⑪) 本一五・一三・一六・二四。⑫) ふくらんだ懷には、適当な時まで進物を隠しておくことができた。⑬) 伝二・一四。八九。一。⑭) ヘブレオ語本「心の静かなる者はさとき人なり」。一雅一・一

## 第十八章

自然や日常生活の喩による智慧の讚美

一 友を離れんと欲する者は機会を求む、かかる人はいつの時にも非難すべ  
 き者なり。二 愚者は、汝その心に適う事を云うに非づば、聰明の言をも受  
 け容れず。三 悪しき者は罪の淵に陥りし時にも、之を意に介せず、されど  
 汚名と恥辱、彼に従う。四 人の口より出る言は深き水なり、智慧の泉は  
 溢れ流るる奔流なり。<sup>2)</sup>五 審判の眞実を離れんとして、悪しき者に顛覆する  
 は、善からず。六 愚者の唇は争に加わり、その口は諂ひを起す。七 愚  
 者の口は身の破滅を招き、その唇は己が靈魂の滅亡を齎す。八一枚舌の  
 言<sup>3)</sup>は害なきが如くにして、よく腹の奥にまで至る。<sup>4)</sup>恐怖は怠惰なる者  
 の氣を挫き、男娼の心は飢餓に苦しまん。九 優柔にして己が仕事を緩怠る  
 者は、働きて得し所を蕩尽す者の兄弟なり。一〇 主の御名はいと堅固き塔な  
 り、<sup>5)</sup>義人は之に馳せ寄りて高くせらるべし。二 富める者の財産はその強

## 第十八章

1) 賢き人。—

2) 本二〇・五。

—3) ヘブレオ

談本「告げ口  
する者」。—

4) もはや忘れ  
られない。—

5) 天主に依り  
頼む人は安全  
な避難所にい  
るようなら  
の。

一一 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二  
 き城市にして、彼を困む堅固き石垣の如し。<sup>6)</sup> 一三人の心は滅<sup>まろ</sup>  
 亡の前には高<sup>たか</sup>ぶり、尊まるる前には謙遜る。<sup>7)</sup> 一三聞かざる前  
 に先ず答うる者は、己の愚にして恥ずべき者たるを示す。<sup>8)</sup>  
 一四人の心は己が病弱に堪う、されど心の怒り易きは、誰か  
 之に得堪えんや。一五賢き心は知識を得べし、智慧ある者の耳  
 は教を求む。一六人の贈物はその道を広くし、諸侯の前に之を  
 入らしむ。<sup>9)</sup> 一七義しき者は先ず己を責む。その友來りて之を  
 紅明さん。<sup>10)</sup> 一八籤は紛争を抑止め、強き者の間ににおいても事<sup>とも</sup>  
 を決定む。<sup>11)</sup> 一九兄弟に助けらるる兄弟は堅固き城市の如く、  
 審判は邑の門の如し。<sup>20)</sup> 人の口の果によりてその腹満され、  
 その唇の生ずるもの、彼を飽かさん。<sup>12)</sup> 二死生は舌の左右す  
 る所なり、之を愛する者はその果を食せん。<sup>21)</sup> 善き妻を得た  
 者は幸福を得たるなり、且主より歓喜を得ん。善き妻を得た

6) ヘブレオ語本「これを高き石垣の如くに思う」。  
 7) 本一一・二。集一〇・一五。一八集一一・八。<sup>9)</sup> 一  
 パレスチナ地方では誰も進物を携えずには偉い人の前に出ない。<sup>10)</sup> この箴言は、まず両方の言い分を聴いてから判決を下すことをして、裁き人たちに教える。  
 11) ほかの方法で紛争が解決し難い時は、天主の御裁定を求めた。籤を抽くはそのわべの徵。<sup>12)</sup> 誰でも自分の談話の結果を受けねばならぬ。

二二

い出す者は幸福を追い出すなり、されど姦婦(13)を置く者は愚にして不義なり。三貧しき者は哀願の調子にて語り、富める者は剣もほろろに答えん。四交わりて心優しき人は、兄弟よりも好ましからん。<sup>(14)</sup>

## 第十九章

賢き貧者、賢き妻、賢き子などの称讃

一貧しくして歩む者は、富みて己が唇(くちびる)を曲ぐる<sup>(1)</sup>愚なる者に優る。二心に知識なくば、善き事あらず、足を急がする者は躡くべし。三人の愚さはその歩みを躡かしむ、しかも彼はその心に天主と争う。<sup>(2)</sup>四富は多くの友を増す、されど貧しき者は有ちし者までも之より離る。五偽証人は罰を免れず、虚偽を云う者は遁るる能わず。<sup>(3)</sup>六権勢ある者を敬い、また贈物を与える者の友となる人は多し。七貧しき人

<sup>(13)</sup>悪を固執している女。そうでなければこれを赦すのがキリスト教の精神(聖アウグスチノ)。  
<sup>(14)</sup>頼もしい友人は、肉親の兄弟よりも大切にすべきもの。

第十九章 ①邪悪な言葉を吐く。②自分の過失で招いた禍を主のせいにして。③但一三・六一。

七 六 五 四 三 二 一

の兄弟は彼を憎む、なおさら友は彼より遠ざかれり。ただ言をのみ求むる  
 者は何をも得ざるべし、八されど心ある者は己が靈魂を愛し、聰明を保つ  
 者は幸福に逢わん。九偽証人は罰を免れず、虛偽を云う者は亡ぶべし。<sup>4)</sup>  
 一〇奢侈は愚者に相應わず、侯を治むるは臣僕に相應わず。二人の了識は忍  
 耐によりて知らる、その榮譽は非<sup>5)</sup>を咎めざるにあり。一一王の忿怒は獅子  
 の咆ゆるが如く、その喜悦は草の上の露の如し。一二愚なる子はその父の嘆  
 きにして、諂をなす妻は雨漏の絶えざる屋根の如し。三四家と富とは父祖よ  
 り与えらる、されど賢き妻は特別に主より賜わるなり。<sup>6)</sup>一五怠惰は深き  
 睡眠に陥らしむ、怠る者は飢ゆべし。一六誠命を守る者は己が靈魂を守るな  
 り、されど己が道を忽せにする者は死せん。一七貧しき者を憐む人は主に貸  
 すなり、主はその立替えたる所を之に返し給うべし。<sup>7)</sup>一八汝の子を懲ら  
 せ、失望するなけれ、また之が死することを心中に望むなけれ。一九短氣なる  
 者は損を受けん、奪い取らば、更に損を増さん。二〇勸告を聞き、教訓を受

4) 本章五節參照。—5) 自分に加えられた不當。—6) 故に天主にこれ願い求めるがよい。—7) 貧しい人々は天主の代理者である。マテオ二五・四〇参照。—8) 復讐のため暴力を用いれば。

二一 けよ、さらば汝の晩年に賢きを得べし。二二 人の心には多くの思念浮かぶ、されど天主の御旨は変らざるべし。二三 色しき人は憐憫深し、されど貧しき者は偽る者<sup>9)</sup>に優る。二四 主畏るれば生命に至り、災禍に見舞わることなく、常に豊なるべし。二五 懈怠なる者はその手を腋窩に隠し、之をその口まで挙げんとすらせず。二六 悪しき者鞭たるれば、愚なる者も賢くならん。二七 されど汝もし賢き者を譴責しめなば、彼教訓を曉らん。<sup>12)</sup>二八 父を苦しめ母を逐い出す者は、恥ずべくして不幸なる者なり。二九 子よ、教を聴くことをやめずして、智慧の言を知れ。三十 不正なる証人は審判を嘲り、悪しき者の口は不正を呑む。三一 審判は嘲る者の爲に、権は愚者の体を打つ為に備わる。

9) 与えるのがいやで、口実を設ける  
金持。——10) 本二六・一五。——11) 忘け者は食う事さえ怠る。手を拱いて、食物を口に運ぼうとしない。12)かれが教訓を聞き入れるのはまだ徵罰によつてのみ。——12) 本二一・一一。

## 第二十章

酩酊、長上に対する不従順、怠惰などの戒め

一 葡萄酒<sup>ぶどうしゅ</sup>は淫乱の因にして、酩酊<sup>ひどく</sup>は人を騒がしむ、凡て之を喜ぶ者は賢明ならざるべし。

## 第二十章

1) 本一九・一

二 参照。一

ニ 王の恐ろしき<sup>(1)</sup>は獅子の咆ゆる如し、之を怒らす者は已が生命に對して  
 罪を犯す。<sup>(2)</sup> 三 爭<sup>(3)</sup>より離<sup>(4)</sup>るるは人にとりて榮譽なり、されど愚なる者は  
 皆<sup>(5)</sup>爭<sup>(6)</sup>に加わる。四 忘惰なる者は寒きを理由として耕すを欲せず、是の故  
 に夏に至りて食を乞うとも与えられじ。五 人の心の智慧は深き水の如し、  
 されど賢き人は之を汲み出さん。<sup>(3)</sup> 六 懲懾<sup>(7)</sup>深しと称ばるる人は多し、され  
 ど誰か忠実なる者を見出さんや。七 身を正しくして歩む義人は、已が後に  
 幸福なる子孫を遺さん。八 審判の席に坐する王は、その一瞥もすべての悪  
 を打散らす。九 誰か「わが心は潔し、我に罪の汚れなし」と云うを得ん  
 や。<sup>(4)</sup> 一〇 二様の分銅に二様の枰、是等は共に天主には憎むべきものなり。<sup>(5)</sup>  
 二 童子にありてもその好む所によりて、その所行の潔く正しきかが曉らる  
 べし。二 聽く耳、見る眼、両つながら主は之を創造り給えり。三 窮乏汝を  
 挫かざるよう、睡眠を愛するなれ、汝の眼を開け、さらばパンに飽くべ  
 し。四 買う者は皆云う、惡し、惡しと。しかも去れば則ち自ら誇らん。<sup>(6)</sup>

命が危くなると、自分の生  
 命が危くなるから。<sup>(3)</sup> 水  
 を低い所から高い所へ汲み  
 あげるのは勞多き仕事とさ  
 れていた。一本一八・四。  
 一四六。一本一八・四。  
 一 本一八・四。

6) この箴言は、利己の心

で私利を圖ることに對しての言葉。<sup>17)</sup>他人の保証をするような馬鹿者からは、担保を取つてもいい。<sup>18)</sup>一本二七・一三。<sup>19)</sup>しまいにはパンの代りに砂利をかじらなければならぬよう自身になる。<sup>19)</sup>出二一・一七。<sup>20)</sup>利二〇・九。マテオ一五・四。<sup>21)</sup>本三〇・一七。<sup>22)</sup>羅一二・一七。撒前五・一五。彼前三・九。<sup>23)</sup>「<sup>11)</sup>本章一〇節。<sup>12)</sup>「聖なるものを呑む」という語句は、虐待する、迫害するという意味にしか解せられない。ヘブレオ語本では、「軽々しく聖なることを語る」。

一五 金もあり、宝石も亦数多あり、されど貴き器は知識の  
唇くちびるなり。一六 他人の保証を為せる者よりその衣服を取り、  
他人の代りに彼より担保を得よ。<sup>7)</sup> 一七 詐取したるパンは人  
に甘し、されど後にはその口砂利くちじやりに満たさるべし。<sup>8)</sup> 一八 計  
画は相議るによりて確定せらる、戦争は深き慮りを以て  
行うべし。一九 秘密を漏らし、虚偽いっぴを触れ歩き、唇くちびるを開ず  
るを知らぬ者に干与かかわるなかれ。二〇 己が父母を呪う者は、  
その燈火暗闇ともしびくらやみの中にて消ゆべし。<sup>9)</sup> 二一 初に急ぎて手に入れ  
んとする遺産は、終に祝福おめでなからん。二二 云うなかれ、「我  
悪に報復いきんいん」と。主まを待て、彼汝かれなんじを救い給わん。<sup>10)</sup> 二三 二  
様の分銅は主の憎み給う所なり、不正なる秤はかりは善からず。<sup>11)</sup>  
三四 人の歩みは主によりて導かる、さるを何人か己おのが道を了みちさと  
るを得んや。二五 聖なるものを呑み、<sup>12)</sup> 誓願せいがんを取り消すは、人

二六

にとりて滅亡なり。<sup>13)</sup> 二六 賢き王は惡しき輩を打散らし、車くる

二七

輪もて之を轢く。<sup>14)</sup> 二七 人の氣息は、心腸の奥をも隈なく探さ

二八

る、<sup>15)</sup> 主の燈火なり。<sup>14)</sup> 二八 憐憫と眞実とは王を守る、その位

二九

は寛仁によりて堅し。<sup>15)</sup> 二九 若き者の喜悦はその力にして、老

三〇

いたる者の尊貴はその白髮なり。<sup>16)</sup> 三〇 傷の青き痕<sup>16)</sup> は惡しき

所

所を拭い去らん、腹の奥底まで徹する打擲はなおさら然り。

## 第二十一章

天主に対しては人智の空しきことなど

一 王の心は主の御手の中にありて水を導くが如し、彼の欲み給う方に之を向け給わん。 二 人の道はいざれも己が目に直しと見ゆ、されど主はその心を衡り給う。 三 憐憫と正義とを行うは、犠牲よりも主の御意に適う。 四 心の尊大は目を高ぶらすものなり、惡しき者

第二十一章 ①本一六・二。二〇・

二四。一<sup>2)</sup>本一五・八。米六・六一

八参照。

<sup>13)</sup> 故に軽卒に誓願を立ててはいけない。 <sup>14)</sup> 王は惡人に相当の罰を与える。それが打穀車が穀物をひきつぶす喻であらわしてある。 <sup>15)</sup> 天主のともし給うた灯で、心の奥底にまでも透る光。<sup>16)</sup> 教育者に鞭で打たれたみづばれの痕。

五の燈火は罪なり。三五強き者<sup>4)</sup>の図る所は常に豊裕を齎す、されど怠惰なる者は常に貧困なり。六虛偽の舌もて資財を集むる者は空しくして愚なり、ついに死の罠にかかるべし。七悪人の奪いしもの<sup>5)</sup>は之を滅亡<sup>6)</sup>せん、彼等は正義を行ふを欲まさればなり。八人の邪曲なる道は道に非ず、されど潔き者はその為す所直し。九屋根の隅に坐するは、六争を好み婦と家を共にしておるに優る。十悪人の靈魂は惡を望む、彼はその近親者をも憐まじ。一一小さき者は、害毒を流すもの罰せらるる時、智慧を増し、賢き者に従う時、知識を得べし。一二義しき者は惡しき者を惡より引離さんとて、惡しき者の家を顧る。一三貧しき者の叫声に耳を掩う者は、自ら叫ぶとも聽かれざるべし。一四秘かなる進物は忿怒を消し、懷にしたる贈物は此上なき憤怒をも宥む。一五義を行うは義しき者には喜悦なれども、惡事を働く者には恐怖なり。一六教の道を迷い出する者は、巨人<sup>9)</sup>の集会の中にも留

(燈火)は、高ぶつた目で物事を見、心に思いあがることである。しかしこれはある。勤勉罪である。——<sup>4)</sup>暴虐な者。——<sup>5)</sup>炎熱、雨露、寒氣に曝される。——<sup>6)</sup>本章一九節。本二五・二四。——<sup>7)</sup>本一九・二五。——<sup>8)</sup>「巨人の集会」とはヘブレオ語本によれば「蔭の國」すなわち死人のすみかなる「よみ」。

一七  
 一八  
 一九  
 二〇  
 二一  
 二二  
 二三  
 二四  
 二五  
 二六  
 二七  
 二八  
 二九  
 三〇  
 まらん。一七饗筵を好む人は貧しくなり、葡萄酒と肥えたる物とを好む人は富むことあらじ。一八惡しき者は義しき者の代りに、不義なる者は直き者の代りに付さるべし。<sup>10)</sup>一九荒野に住むは、争を好む怒り易き婦と共に住むに優る。<sup>11)</sup>二〇義しき者の住居には望ましき宝と油とあり、賢からぬ者は之を使い果さん。二一正義と憐憫とを求むる者は、生命と正義と榮誉を得べし。二二賢き人は強き者の城市に上りて、力と恃む所を崩壊したり。二三己が口と舌とを守る者は、その靈魂を苦惱より守る。二四高ぶり傲る者を無知と称す、彼は怒るや尊大を表す。二五欲望は怠惰なる者を殺す、蓋はその手何事をもなすを欲せざればなり。二六彼は終日懨れ望む、されど義しき者は与えて息まじ。二七惡しき者の犠牲は憎むべし、そは惡事の為に獻げらるればなり。<sup>12)</sup>二八偽証人は亡びん、されど従順なる者は勝利を語らん。<sup>13)</sup>二九しき人は厚顔無恥なり、されど直き者は己が道を正す。<sup>14)</sup>三〇主に向

10) 惡人が義人に加えようとした悪は、当然の罰として己が身に歸り来るである。——11) 本章九節。  
 本二五・二四。集二五・二三。——12) 例えば天主の御旨に適わぬことを成就させて頂こうとして。——13) 本一五・八。集三四・二一。——14) 義人は事をなす前に、それを正しくしようと心を配る。悪人は自分のした不正を、厚顔無恥で正当化しようと/or>する。

三一

かいては智慧もなく聰明もなく熟慮もなし。三人は戦鬪の  
日の為に馬を用意すれども、好運を恵み給うは主なり。<sup>(14)</sup>

<sup>(14)</sup>人々の智慧(三〇節)のよう  
に、その強さも、天主なしでは  
空しいものである。

## 第二十二章

前章の続きと小箴言集

一　一善き名は大いなる富よりもよく、善き恩寵は白銀や  
黄金に優る。<sup>1)</sup> 二富める者と貧しき者と相逢えり、主は  
是等両者の創造主に在す。<sup>2)</sup> 三賢き者は災禍を見るや身  
を隠し、淺慮なる者は進み行きて損害を蒙れり。<sup>3)</sup> 四虔  
しさの結果は主を畏ること、富と榮と生命となり。  
五邪曲なる者の道には武器と劍と<sup>4)</sup> あり、されど己が  
靈魂を守る者は之を離<sup>はな</sup>ること遠し。<sup>5)</sup> 六諺に曰く、若<sup>わか</sup>  
き者その道に慣るる時は、老いたる後も之を離れじ、  
と。七富める者は貧しき者を支配し、金を借り受くる

第二十二章 <sup>1)</sup>伝七・二。—<sup>2)</sup>主は  
貧者を助けさせるために富者を、富  
者をためすために貧者を造り給うた  
(聖アウグスチノ)。一本二九・一  
三。—<sup>3)</sup>この世の子どもは、獨得の  
やり方で光の子どもより巧みである  
から(路一六・八)、それによつて  
外部の損害を上手に遭れることが  
多い。<sup>—4)</sup>ヘブレオ語本「茨とわな  
と」。

者は貸主の下僕となる。八不義を播く者は災禍を刈り取り、その忿怒<sup>5)</sup>の杖<sup>5)</sup>によりて亡びん。九憐憫を好む者は祝せられん、蓋は己がパンを貧しき者に分与えたればなり。贈物をなす人は勝利と榮誉を得べし、されど之を受納くる者の靈魂を奪う。一〇嘲る者を追い出せ、さらば争も之と共に出て行き、諂いと侮辱とも亦やまん。一心の潔白を愛する者は、その唇の快きによりて王を友とするに至らん。二主の御眼は知識ある者を守る、惡しき者の言は覆滅ぼさる。三怠惰なる者は云う、「戸外に獅子あり、我巷の中にて殺さるべし。」と。一四他人の婦の口は深き坑なり、主の怒り給う者之に陥らん。五童の心には愚さ繋がれたり、懲戒の杖之を追出さん。一六己が富を殖やさんとて貧しき者を虐ぐる人は、自ら富の優れる者に与えて困窮するに至らん。一七汝の耳を傾けて、智慧ある者の言を聴け、汝の心をわが教に用いよ。一八之は汝の腹に保たば、汝に樂しかるべく、汝の唇より溢れ

5) 忿怒、すなわち暴虐によつて己に害を加えて。一〇ヘプレオ語本には最後の部分がない。これは後に説明のため書き加えられたのである。一集三一・二八。一七獅子は普通、人の住んでいる町のなかまでは来ない。一八こゝから新たにあまりしられていない「智者」の短かい箴言集が始まる。

一九　　出でん。一九かくて汝主に信賴を置くに至るべし。是故に我今日之を汝に

示せり。二〇視よ、我は思想と知識とを以て三度までも累ねて之を汝の為に

に錄せり、二一是、汝が己を遣したる者に<sup>9)</sup>その中より答え得るよう、

われが汝に確実なる根拠と真理の言とを示さんが為なり。二二貧しき者に

は、その貧しきが故に、非道をなすなかれ、また困窮せる者を門<sup>10)</sup>にて

虐ぐるなかれ、二三そは主その訴訟を審判き、その靈魂を苦しめたる者を

苦しめ給うべければなり。二四怒る人の友となるなかれ、憤る人と共に歩

むなかれ。二五恐らくは汝その道を学びて、汝の靈魂に躓きを招くことあ

らん。二六手を拍ちて<sup>11)</sup>負債の保証人に立つ者に与するなかれ、二七蓋し汝

もし返却すべきものなくば、人が汝の床より覆布を奪うべき何の理由か

あらん。二八汝の父祖が定めたる古き境界を踰ゆるなかれ。二九汝その業に

迅速なる人を見たりや、かかる人は王の前に立つべく、賤しき者の前に

居らじ。<sup>12)</sup>

(9)父母のこと。

かれらはわが子

に智慧を学ばせ

ようと、これを

賢人の許へ遣す

から。<sup>10)</sup>裁判

を行なう処。一

11)輕卒に。

12)すぐれたこと

をなし得る能力

のある人は、い

つまでも埋もれ

たまゝではいな

いであろう。

## 第二十三章

智者は富や饗宴を求めず、酩酊や淫行を慎しむ

一 汝侯と共に坐して食せんとする時は、汝の面前に置かれたるものを見意して見るべし。二 而して汝もし汝の心を左右し得べくんば、汝の咽喉に小刀を当てよ。三 その食物を欲するなれ、その中には虚偽のパンあればなり。四 富まんが為に労苦せずして、汝の配慮を適度に留めよ。五 汝の有つこと能わざる富に向かいて汝の眼を翫ぐるなれ、そは鷺の如き翼を生じて天の方に飛び去るべければなり。六 嫉妬深き人と共に食せず、その食物を欲するなれ、そは彼占卜者や夢解をする者の如く、己が知らざる事を推測ればなり。食し、且飲め、と彼は汝に云わん、されどその心は汝と共にあらざるなり。八 汝は食せし食物を吐き出し、汝の美しき言をも失うに至らん。九 愚なる者の耳に語ることなかれ、そは彼等汝の語る教を軽んずべければなり。一〇 小さき者の境界に触

### 第二十三章

(1) 小刀がのどもとに擬せられているかのように注意せよ。一

(2) ある食物は一同の前に出され(3) 現世の財を得るためにあまり智慧を使い過ぎるな。(4) 主人の真意を悟ると、食物が旨くなく

るることなかれ、また孤兒の烟に立入ることなかれ、ニ蓋し、彼等の近親者<sup>5)</sup>は強くして、自ら彼等の汝に対する訴訟を審判くべし。三汝の心を教に、汝の耳を知識の言に傾けよ。三子供に懲戒を客むなかれ、蓋し汝彼を鞭打つとも、その死することあらじ。四汝彼を鞭打たば、その靈魂を冥府より救うを得ん。一五わが子よ、もし汝の心賢からば、わが心も汝と共に喜ぶべく、一六汝のしき事を語らば、わが腎<sup>7)</sup>も雀躍すべし。一七汝の心罪人を羨むべからず、却つて終日主を畏れよ。一八そは汝臨終の時に希望を有も得て、汝の期待空しからざるべければなり。一九わが子よ、汝聴きて賢くなり、汝の心を道に向けよ。二〇大酒家の酒宴や、貪り食わんとて肉を持ち寄る者共の饗筵<sup>8)</sup>に参加ふことなかれ、二一そは飲酒に耽る者や持ち寄りの饗筵<sup>9)</sup>を催す者は滅ぶべく、睡眠<sup>10)</sup>は櫛襷<sup>11)</sup>を着るに至らしむべければなり。三二汝を儲けたる汝の父に聴

なるから。15)ヘブレオ語本「贖い手」。殺された者の極く近い親戚は、その復讐をしなければならなかつた。

16)本一三・二四。本二九・一五。集三〇・一。17)聖書の言い方で、腎臓は情の源。18)本二四・一。19)昔は大饗宴の際には、客が自分の食べる分を持ち寄つたものである。こゝではその習慣を暗にきしている。哥前一  
一・二一参照。10)忘情の義。

け、汝の母をその老いたる時にも軽んずるなかれ。11) 二三真理  
 を買え、智慧と教と了悟とを売るなれ。12) 三四義しき者の父  
 は喜び躍る、智慧ある子を儲けたる者は之を楽しみにせん。  
 五 汝の父母をして喜ばしめ、汝を生みし者をして樂しましめ  
 よ。二六わが子よ、汝の心を我に与え、<sup>13)</sup> 汝の眼をしてわが道  
 を見守らしめよ。二七娼婦は實に深き陥穰なり、他人の婦は狭  
 き井なり。<sup>14)</sup> 二八彼女は追剝の如く道に待伏せして不注意なる  
 者を殺さん。二九禍あるは誰ぞ。禍あるは誰の父ぞ。争<sup>15)</sup> を  
 なすは誰ぞ。陥穰に陥るは誰ぞ。故なくして傷を受くるは誰  
 ぞ。眼の赤きは誰ぞ。三〇そは葡萄酒に時を過し、頻に杯<sup>16)</sup> を  
 飲みほす者に非ずや。三一葡萄酒の黃金色にして、玻璃の中に  
 その色輝く時、汝之<sup>17)</sup> を視るなれ。始は樂しからんも、三二そ  
 は終に蛇の如く噛み、蝮の如く毒を注がん。三三汝の眼は他人

11) 長い間お前の世話をした  
 から。12) 「買え」と「売  
 るなれ」とは、「得んと  
 努めよ」と「失うな」との  
 意味で、対照的に用いてあ  
 る。13) 汝の心を与るべき  
 は、我(智慧)にであつて、  
 穢らわしい女たちにではな  
 い。14) 昔パレスチナで雨  
 水を溜めて置いた貯水坑は  
 深い広い坑で、石一枚でふ  
 たができるよう上の方が  
 すぼまつて狭い口になつて  
 いた。これに落ちこむと、  
 他人の力を借りずには出ら  
 れなかつた。淫婦と関係す  
 るのもそれと同様身の破滅  
 だというのである。

三四  
三五  
の婦を見、汝の心は邪曲なる事を語らん。三四  
かくて汝、海の最中にて  
眠る者の如く、蛇の失せたるに熟睡せる舵取の如くなりて 三五  
云わん、  
「人々我を打ちたれど、我痛まざりき、我を引きしかど、我覚えざり  
き。<sup>15)</sup> 我は何時目覚めんや、何時再葡萄酒を得んや。」と。

<sup>15)</sup> 酷酊の極、痛い  
ことさえ少しも意  
識しなかつた。

## 第二十四章

智者と愚者との対比

一 悪しき人々を羨むなれ、また彼等と共に居ることを望むなれ、<sup>1)</sup>  
 二 そはその心強奪を図り、その唇虚偽を云えばなり。三 家は智慧によりて建てられ、聰明によりて堅固にせらるべし。四 その庫は教によりてあらゆる貴く最美しき資財に満たされん。五 智慧ある人は強く、  
 知識ある人は剛毅にして確乎たり。六 そは戦鬪は深き慮りもて始むべく、  
 計略の多き所に幸すべければなり。七 智慧は愚なる者にとり、  
 高くして及ぶべからず。彼は門<sup>2)</sup>にてその口を開かざるべし。八 悪を

第二十四章  
 1) 本二三・一七。  
 2) 裁判および会議の場所。

なさんと図る者は、愚者と称ぶべし。・九愚なる者の思う所は罪なり、誘る者は人々に憎まる。一〇汝もし患難の日に挫けて望を失わば、汝の力弱くならん。一一死地に曳かるる者を救え、滅亡に引かるる者を助け出すことをやむるなけれ。(3)一二汝「力足らず」と云うとも、心の中を見給う者之を曉り給う、(4)汝の靈魂を守り給う者には何事も隠れなければ、彼それぞれの所行に応じて人に報い給わん。一三わが子よ、蜜を食せよ、そは佳き物なればなり、生蜜は汝の口腔に此上なく甘し。一四智慧の教も亦汝の靈魂にとりてかくの如し。汝之を得たらんには、終に希望ありて、汝の希望失せざるべし。一五待伏して、義人の家に悪を求むるなけれ、またその安息を擾すなけれ。一六夫れ、義しき者は七度倒るとも復起き上らん、(6)されど惡しき者は禍に陥るべし。一七汝の敵の倒るる時にも喜ぶなけれ、その滅ぶる時にも汝の心を躍らすなけれ、一八是、

(3) 悪人により、もししくは裁判において、暴虐を受ける人々。一詩八一・四。一(4)本当にそうであるか、それとも口実に過ぎないかは、天主が見ぬき給うであろう。一(5)智慧が蜜に譬えてある。詩一八・一参考。一(6)こゝに言つてあるのは、義人の罪のことではなく、その患難および天主の御加護のこと。七度は象徴的な数。百五・一九など参照。

一九  
主しゅが鬱みそなわして嘉よみし給たまわづ、御忿怒おんいかりを彼かれより移うつし給たまうことのなからん為ため  
なり。一九 極惡人こくあくにんと争あらそうなれ、また天主てんしゅを蔑なみする者ものを羨うらやむなれ、  
二〇 そは惡あしき者ものは將來しょうらいに希望きぼうなく、天主てんしゅを蔑なみする者の燈火ともひは消けさる  
べければなり。二一 わが子こよ、主おらと王おうととを畏おそれよ、讒そしる者ものに交まじわる  
なれ、二二 そは是等これらの者ものの滅亡ほろびは俄にわかに起おこればなり、この両者りょうしゃの倒たお  
るるは誰だれか之これを知しるや。二三 次つぎも亦智慧またちえある者の為ためなり、審判りょうしゃく時に  
偏かたよるは善よからず。二四 惡人あくにんに向むかいて、「汝なんじは義ただし」と云いう者は、  
諸民しょみん之のろを呪のろうべく、諸族しょぞく之これを憎にくむべし。二五 之これを答とがむる者は称たたえら  
れ、祝福しゆふくその上うえに下くだらん。二六 正ただしき言ことばを答こたへうる者は、唇くちびるに接吻せつぶん  
なり。二七 外そとにて汝なんじの仕事しごとの用意よういをなし、力を尽つくして汝なんじの畠はたけを耕たがせ、  
さらば汝なんじ後に己おのが家いえを建たつるを得えん。二八 故ゆえなく汝なんじの近ちかき者ものはもか  
証人しょうじんとなるなれ、また汝なんじの唇くちびるもて何人たとびとをも欺あざむくなれ。二九 汝なんじ云い  
うなれ、「彼かれの我われに為なしたる如ことく、我われも亦彼かれに為なさん、我われは誰たれに

(7) 天主てんしゅは不幸ふしこうにあつた者ものからこれを取り除ぬき、それを喜んだ者ものに振り向け、以て氣味けいみよがつた者ものを罰ばつし給たまうことがある。  
一九 主おらと、この世よのでその御權威ごけんゐを代表だいひしている者ものと。(8) 天主てんしゅを畏おそれぬ者ものおよび王おうに服せぬ者もの。(9) 申  
一〇 利一九・一五。申一・一七。一六・一九。集四二・一。一  
(10) 愛撫あいぶのよう快い。

三〇

もその為したる所に応じて報いん。」と。<sup>12)</sup> 三〇我、怠惰なる人の烟の

傍と、愚なる人の葡萄畠の傍とを通り過ぎしに、三一見よ、そは全く

<sup>12)</sup>本二〇・二二。

かたわらと、愚なる人の葡萄畠の傍とを通り過ぎしに、三一見よ、そは全く

三二見よ、そは全く

<sup>13)</sup>本六・一一参照。

尊廟に満たされ、茨その表面を覆ひ、石垣崩れ居たり。三二我之を見し

時、わが心に藏め、この例より教訓を得たり。三三我は云えり、「汝少

しく眠り、少しく微睡み、少しく手を束ねて休まんとす、かくては窮乏飛脚の如く、物乞の境涯武人の如く、汝に来らん、」と。<sup>13)</sup>

## 第二十五章

つつましきと、争いを避くることと、快活とのすすめ

一 是等も亦サロモンの箴言にして、ユ

ダ王エゼキアの臣下たる人々が集めたるものなり。二天主の榮誉は事を究むるにあり。三天の高さと、地の深さと、王

**第二十五章** ①エゼキアは、サロモンの死後二百五十年を経た頃のユダ王で、その治世には予言者イザヤその他学者たちがいた（王下一八・二六。賽三七・二参考）。②天主の御攝理の測り知れない不思議なこと。③王たちの偉さは、最高の裁判者としてあらゆる訴訟事件を良心的に審理する所にある。

の心とは測り難し。四銀より鏽を除け、さらばいと純粹き器出ずべし。4)

五王の面前より悪しき輩を除け、さらばその位正義によりて確立せん。

六王の前にて傲慢なる態度を示すなれ、また偉大なる人の場所に立つなかれ。七蓋し汝が君侯の前にて下げらるるよりは、「此処に上れ」と

云わるることよけれ。八汝の眼に見しことを、鬪争に際して性急に口に出すなれ、汝もし汝の友の名譽を害せば、恐らくは後に至りて、償を

なすこと能わざらん。九汝の係争は汝の友と共に処理せよ、秘密を他

人に漏らすなれ。一〇是、彼が之を聞くに及びて、汝を侮辱し、罵りて

止まざるが如きことのなからん為なり。好意と友情とは人を救う、汝非

難を受くることなからんために、之を保て。二語る言の時を得たるは、

銀の台に金の林檎を嵌めたる如し。二賢くして聽き容るる耳と譴責む

る者は、黄金の耳輪と燐く真珠との如し。三忠実なる使者の之を遣

したる者に於けるは、冷き雪の刈入の日に於けるが如し、そは彼の心を

4)五節にあることの譬喩。一

5)路一四・一

○。一ヘブレ

オ語本「なんじの隣と」。一銀地に象嵌した金の絵模様。一

8)耳環がそれ以下がつている銀細工と一組を

なしているように、忠告者と注意深い傾聽者と

も美わしい一対。

一四

安らかならしむればなり。」<sup>9)</sup> 一四 誇るのみにて約束を果さざる人は、雲と風とのみにて後に雨の来らざる如し。<sup>10)</sup> 一五 忍耐は君侯をも宥むべし、柔軟なる舌は堅きをも碎くべし。<sup>11)</sup> 一六 汝蜜を得たらば、ただ足るほどに食せよ、然らずして飽食せば恐らくは吐出すことあらん。<sup>12)</sup> 一七 汝の足

を隣人の家より遠退かせよ、是、彼が汝に倦きて汝を憎むに至ること

のからん為なり。<sup>13)</sup> 一八 己が隣人に敵いて偽証を陳ぶる者は、投槍、剣、及び銳き矢の如し。<sup>14)</sup> 一九 患難の日に不忠実なる者を恃むは、歯の腐

り、足の疲れたる如く、二〇 寒天に袍を失うが如し。心の悲しめる人

に向かいて歌を唱うは、曹達に酢を注ぐが如し。人の悲哀が心を傷う

は、衣魚が衣服を、虫が木を燃するが如し。三 汝の敵もし飢えんか、

之に食せしめよ、もし渴かんか、之に飲水を与えよ。<sup>15)</sup> 三 三 盖し汝かくなさばその頭に燃炭を積むべく、<sup>16)</sup> また主汝に報い給わん。三 北風は雨を、悲しげなる面<sup>17)</sup> は誘る舌を逐いやる。三四 屋根の隅に坐するは、

三四

二二 二二 二二 二二 二二

9) 本二六・六。一

10) 本一五・一。一

11) ラテン語

pessimoは「甚だ

悪し」で「不幸な」

の義。かゝる人に

向かつて楽しい歌

を歌うのは、傷口

に酢か塩を入れる

ようなもの。

12) 羅一二・二〇。

13) 敵に恥ずかしさ

を感じさせる。

14) 即ち相手が他人

のこと悪しがま

に言ふ時に、そろ

いう顔をすると、

悪口をやめる。

争あらそいを好む婦と家を共にしておるに優る。<sup>15)</sup> 好き音信の遠き國より來

<sup>15)</sup> 本二一・九。

るは、渴ける者かわるものに對する冷水の如し。<sup>15)</sup> 義しき者が惡しき者の前に屈す

<sup>16)</sup> 義人が惡人を恐れて屈すれば

るは、泉の足もて汚さるが如く、水脈の濁れるが如し。<sup>16)</sup> 御稜威を

けがれた泉同様

探り究めんとする者がその御威光に圧倒せらるるは、蜜を多く食するこ  
との人に善からざるが如し。<sup>17)</sup> 語る時に己が氣持を抑制うること能わ  
ざる者は、開け放しにして石垣を繞らざる呂の如し。

<sup>16)</sup> もう何んの役にも立たない。  
<sup>17)</sup> 集三・二二。

## 第二十六章

当然の賞讃と非難——舌の罪

榮誉ほまれの愚者おろかものに應わざるは、夏に雪、

刈入時に雨ふるが如し。<sup>1)</sup> 故なくして

口に出したる呪咀のろいの人にはかかるは、鳥

の他所に移り、雀すずめのその欲む所に行く

が如し。<sup>2)</sup> 馬うまに対しては鞭、驢馬ろばに対

た。

第二十六章 1) パレスチナで夏に雪が、刈入時に雨が降るのは、季節はずれで普通ではない。 2) 飛ぶ鳥に停る所がないようなもの。 一この箴言はイスラエル民族の多くの人に見られた迷信を攻撃するもの。かれらは呪いは悉く呪つた人に必ずかかるべると信じていた。

しては轡あり、愚者の背に対しては笞あり。<sup>3)</sup> 愚者にその愚さに循いて答うるなれ、恐らくは汝も彼の如くにならん。<sup>4)</sup> 愚者にはその愚さに循いて答えよ、これ、彼が己を賢しと思惟わざらんためなり。<sup>5)</sup> 愚なる使者に託して言い遣る者は、足跛え、不義を飲むなり。<sup>6)</sup> 箴言が愚者の口に相應わざるは、跛アシ者が美しき脚を有てども徒なる<sup>7)</sup>に似たり。<sup>8)</sup> 愚者に榮誉を与うる者は、マーキュリーの石堆に石を積む者の如し。<sup>9)</sup> 愚者の口に箴言あるは、酩酊せる者の手に茨生<sup>10)</sup>するに似たり。一〇判決は係争を定む。愚者を沈黙せしむる人は、忿怒を宥む。ニ己が愚なる行為を繰返す浅慮なる者は、己が吐きたる物の所に帰り来る犬の如し<sup>11)</sup> 一二自ら見て智慧ありとする人

<sup>3)</sup> 本二三・一三。一<sup>4)</sup> 志した目的を達することができなくなつてしまふ。一本二五・一三参照。5) 一使うことができなかから。一<sup>6)</sup> ヘブレオ語は「宝石を石塚の上に投ぐる」または「石を投石索（いしなげ）につなぐ」と訳することができる。タルガタ訳文の意味は次の如し。マーキュリーは異教徒に旅の守護神とされていた神。道ばたにその像をのせた柱が立つていて、旅人は通りすがりに小石をその前に置いたものであるが、それが積もり積もつて遂には山のようになつた。これに石を加えるなどは全くむだなことであるが、愚者に榮誉を与えるのもそれと同様何の役にも立たない。一<sup>7)</sup> 彼後二・二二。

一三 を、汝見しことありや、彼よりも却つて愚なる者に希望あり。一三怠惰なる  
 者は云う、「道に獅子あり、旅路に牝獅子あり。」と。一四扉が蝶番によ  
 りて回轉する如く、<sup>8)</sup>怠惰なる者もその臥床の上に輾転す。一五怠惰なる者  
 はその手を腋窩に隠し、之をその口まで擧ぐることをすら労多しとなす。<sup>9)</sup>  
 一六怠惰なる者は自ら見て、金言を語る七人の者よりも賢しとなす。<sup>10)</sup>短  
 気にして、通りがかりに、他人の喧嘩に加わる者は、犬の耳を掴む<sup>11)</sup>者の  
 如し。一八矢を放ち槍を投げて人を死に至らしむる者の悪しきが如く、<sup>12)</sup>欺  
 きて己が友に害を与えるに及びて「我ただ戯れになせしのみ」と  
 いう人も亦然り。二〇薪尽くる時は火消え、告口をなす者除かるる時は紛争  
 息むべし。二一怒り易き人が爭<sup>13)</sup>を起すは、燠に炭を、火に薪を加うるが如  
 し。二二告口をなす者の言は害なきが如く<sup>12)</sup>にして、能く腹の奥に徹る。<sup>13)</sup>  
 二三高ぶる唇の悪しき心に伴えるは、土器を銀の滓<sup>14)</sup>もて飾らんとするにさも  
 似たり。三四敵は心に虚偽を抱く時、その唇によりて曉らる。<sup>14)</sup>二五彼その

8) その場所を離れず。

9) 本一九・二

四。10) 犬をひ

どく怒らせる

行為で、ほと

んど殺される

ほど危険な目

に会うことが

ある。11) 本

一五・一八。

12) ヘブレオ語

本「味よき菓

子の如く」。

13) 本一八・八

参照。14) ブレオ語本

「憎む者はそ

二七 二八

声を低くする時、之を信ずるなかれ、其はその心に七  
 つ<sup>15)</sup>の惡意あればなり。二六佯りて憎悪を隠す者は、その  
 惡意集会の中にて顯れん。三七陥罪を掘る者は之に陥るべ  
 く、石を転ばす者は、その石已の上に歸り来らん。二八虛  
 偽多き舌は真理<sup>16)</sup>を好まず、滑かなる口は滅亡を招く。

## 第二十七章

好意による非難は感謝して受くべし——勤勉の讃美

一明日のことを誇るなれ、そは汝次<sup>ほ</sup>の日に何事が起る  
 やをも知らざればなり。二他人が汝を讃<sup>ほ</sup>むるはよし、已<sup>おの</sup>  
 が口を以ては然<sup>しか</sup>するなれ、他人はよし、已<sup>おの</sup>が唇<sup>くちびる</sup>を以  
 ては然<sup>しか</sup>らず。三石は重<sup>おも</sup>く、砂<sup>すな</sup>にも重量あり、されど愚者<sup>おろかも</sup>  
 の忿怒<sup>いかり</sup>はこの両者よりも重し。四忿怒<sup>いかり</sup>は憐憫<sup>あわれみ</sup>を垂れず、  
 憎恨<sup>いきどおり</sup>の発したる時<sup>とき</sup>も亦然<sup>またしか</sup>り、誰<sup>たれ</sup>か激昂<sup>げきこう</sup>せる者の猛烈<sup>なまき</sup>に得

一 二 三 四

の唇をもて自ら飾る」。一<sup>15)</sup>七は完成の数。故に「惡意を遂げる」という意。一<sup>16)</sup>ヘブレオ語本「己が碎く者」すなわち「粉碎してしまうまでは相手を放さない」という意。

## 第二十七章 1) 集二二・一八。

堪えんや。<sup>2)</sup> 五露骨なる非難は秘したる<sup>3)</sup> 愛に優る。六愛する  
 者が傷つくるは、憎む者が佯りて接吻するよりも善し。<sup>4)</sup> 七飽き  
 たる者は生蜜をも蹂躪り、飢えたる者は苦き物をも甘しと思わ  
 ん。<sup>4)</sup> 八己がおりし所を離るる人は、己が巢より飛び去る鳥の如  
 し。<sup>9)</sup> 九膏と種々の香料とは人の心を喜ばず、友の善き勸告は靈  
 魂に快し。<sup>10)</sup> 汝の友と、汝の父の友<sup>5)</sup> とを棄つるなれ、また  
 汝の患難の日に汝の兄弟の家に入るなれ。近き隣人は遠き兄  
 弟に優る。<sup>6)</sup> わが子よ、智慧を学びて、わが心を喜ばせよ、さら  
 ば汝詰責る者に答うるを得ん。<sup>7)</sup> 一二賢き者は禍を見て身を隠し、  
 小さき者は進み行きて損害を蒙れり。<sup>8)</sup> 一三他人の為に保証を為  
 せる者よりその衣服を取り、他人の代りに彼より担保を得よ。<sup>7)</sup>  
 三四夜に起きて大声に己が隣人を祝する者は<sup>8)</sup> 呪う者と等しかる  
 べし。<sup>9)</sup> 一五寒き日に雨漏る屋根と諍を好む婦とは互に相似たり。<sup>9)</sup>

2) ヘブレオ語本「ねたみの前には、誰か立つことを得ん」。怒りや恨みは静まることもしばしばあるが、ねたみは殆ど決して利らがない。<sup>13)</sup> 行為にあらわれない。<sup>14)</sup> 百六・七。<sup>15)</sup> 汝の父の時代からすでに友たる実を示した人。<sup>16)</sup> 小さき者とは愚者のこと。本二二・三。<sup>17)</sup> 本二〇・一六。<sup>8)</sup> まだ相手が賞讃に値することを何もしていらないのにほめる。<sup>19)</sup> 本二五・二十四。<sup>18)</sup> どちらも家に居難くする。

一六 之を抑うる者は、風を抑え、己が右手に油を摑まんとする者の如し。

一七 鉄は鉄を研ぐ、かくの如く人もその友の面を研ぐ。一八 無花果の樹を培う

者はその果を食せん、己が主を守る者は榮誉を得べし。一九 水に之を覗く者

の顔が映る如く、人の心も賢人には顯なり。二〇 冥府と滅亡とは満たざる

ことなし、同じく人の目も飽くことなかるべし。二一 銀が堆積の中にて、

金が炉の中にて試さるる如く、人も亦讀むる者の口によりて試さるるな

り。惡しき者の心は惡を求む、されど直き心は知識を求む。二二 汝たとい

愚者を曰に入れて、杼もて大麥を搗く如く、搗き碎くとも、その愚さは之

より除かれざるべし。二三 努めて汝の家畜の状を知り、汝の群に注意せよ。

えられん。二五 牧場は開かれ、一六 緑草萌出で、乾草山々より集められたり。二六 小羊は汝の衣服の為、小山羊は烟の価の為なり。二七 汝の山羊の乳を、汝の

食物とし、汝の家の需要に宛て、汝の婢を養うに用いて足らしめよ。

10) 集一四・九

11) 本一七・三

12) 冠は幸福と繁榮の象徴。

13) 勤勉な者にはいつの時代にも天主が、

かれ自身およびその家人のために足るだけを与え給う

14) 提前六・八

15) ヘブレオ語

本「山羊の乳は十分にあり」。

## 第二十八章

正義及び惜しまず与えることの報い——貪慾及び冷酷の罰

一 悪しき者は、追う者なきに逃ぐ、されど義しき者は獅子の如く勇敢にして、恐怖なかるべし。二 国の罪によりて諸侯多くなり、三 人々智慧あり、云われし事を曉るによりて、君侯の寿命長くならん。四 貧しき者を虧ぐる貧しき人は、2) 餓饉を齎す烈しき雨の如し。五 法を棄つる者は惡しき者を讀む、そを守る者は之に對して怒る。六 悪しき人々は審判を思わず、されど主を求むる者は一切に留意す。七 身を直しくして歩む貧しき者は、邪曲なる路を歩む富める者に優る。八 法を守る者は智慧ある子なり、されど貪り食う者を養う。九 人はその父を辱しむ。十 高利と利息とによりて、財を積む者は、貧しき者に恵まんとする人の為に之を集むるなり。十一 己が耳を背けて法を聽かざる者は、

## 第二十八章 1) 天主の御

捕が行為の基準でなくなつた所では、人間の權威も永続しない。——2) 無産者が成り上がりつて高い官職につき、貧民を虧げて速く富を得ようとする場合を言う。——3) 本一九・一。——4)かれらと交わる。

5) かような高利を取る者の財産は、天主の御攝理によつて、貧者に慈善を行なう人の手に移るであろう。

一〇 その祈祷も憎まるべし。<sup>6)</sup> 一〇 悪しき途によりて義しき人を欺く者は、お  
 のれ滅亡に陥り、その所有物は、直き者これを得ん。一一 富める人は自ら  
 見て賢しとなす、されど聰明なる貧しき者は彼を測り知らん。一二 義しき  
 者の喜び躍る時には大なる榮あり、悪しき者の治むる時には人々滅ぶ。  
 一三 罪を隠す者は榮えざるべし。されど告白して之を棄つる者は、憐憫を  
 得べし。<sup>7)</sup> 一四 常に畏るる人は幸福なるかな、されど心の頑固なる者は  
 祸害に陥らん。一五 貧しき民の上に立つ悪しき侯は、咆ゆる獅子、飢えた  
 熊の如し。<sup>8)</sup> 一六 聰明に欠くる侯は暴力を以て多くの者を虐げん、されど  
 貪慾を憎む者は己が命を延ぶべし。一七 謔言して人の血を流す人は、坑ま  
 で逃ぐとも、之を止むる者なからん。<sup>9)</sup> 一八 直く歩む者は救わるべく、曲  
 れる道を歩む者はいつか倒るべし。一九 己が烟を耕す者はパンに飽かん、  
 されど懶惰を追求する者は貧窮に満たされん。<sup>10)</sup> 二〇 忠信なる人は大いに  
 称えらるべし、されど速かに富まんとする者は罪なきを得ざるべし。<sup>11)</sup>

6) 本五・八とそ  
 の註参照。一  
 7) 御憐憫を得る  
 には、自分の非  
 を認めること  
 と、罪を避ける  
 ことと、この二  
 つが必要。一

8) 良心が鋭敏で。  
 9) 創四・一二参  
 照。一〇) 本一二  
 • 一一。集二〇  
 • 三〇。一一) 本  
 一三・一一。二  
 ○・二一。本章  
 二二節。

三 裁判の時に依怙の沙汰をなす者は、そのなす所善からず、かかる者は、ただ一口のパンの為にも真理を棄つるなり。三速かに富を得んとして、他人を羨む人は、窮乏の己に来らんとするを知らず。<sup>(12)</sup> 三人を譴責する者は、詭う舌もて之を欺く者よりも、後に至りその感謝を受くべし。三四己が父母より物を取りて、「是は罪に非ず」と云う者は、殺人者の仲間なり。三五自負して尊大に振舞う者は紛争を起す、されど主に希望を置く者は救わるべし。三六己が心を持む者は愚者なり、されど賢く歩む者は救いを得べし。三七貧しき者に与うる人は困窮することながらん、その懇願を軽んずる者は赤貧に逢わん。三八悪しき者興る時は人々身を隠すべく、彼等滅ぶる時は義しき者増すべし)。

## 種々の教訓

## 第二十九章

一 口を譴責する者を、頸を剛くして侮る人は、<sup>(1)</sup> 滅亡俄に之を襲うべ

<sup>(12)</sup> 本一三・一一。  
<sup>(13)</sup> 数も勢力も。

二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三

く、その回復すること決してあらざるべし。二義しき者増す時は民喜び、悪しき者支配權を握る時は民嘆かん。三智慧を愛する人はその父を喜ばず、されど娼婦を養う者は財産を失うべし。四義しき王は国を興し、貪る人は之を亡さん。五己が友に詔いた虛構の言を語る人は、彼の足の前に網を張るなり。六悪人罪を犯す時、民之を陥れ、義しき者は讀え且喜ばん。七義しき者は貧しき者の訴訟を知る、悪しき者は了識を知らず。八悪しき人<sup>4)</sup>は城市を滅亡に至らしむ、されど智慧ある者は忿怒を免れしむ。九賢き人、愚なる者は争わば、怒りても笑いても、安らかなるを得じ。一〇血に渴ける人々は純真なる者を憎む、されど義しき者はその靈魂を求む。一愚なる者は己が氣持を悉く露し、賢き者は之を抑えて後まで蓄う。二虚偽の言を喜びて聽く君侯は、その臣僕すべて悪し。三貧しき者と債権者と相逢えり、この両者を照らし給う<sup>5)</sup>

主からは苦しみを以て人からは教訓を以て、いましめられる者。

2) 路一五・一三。

3) ヘブレオ語「まいないの人」すなわち贈賄を受ける支配者は國の支えである正義を滅ぼす。—4) ヘブレオ語本「嘲る人」。即ち天主の御掻に嘲弄的態度を示す人は、言行を以て到る所にただ不穏不和を起こす。—5) ヘブレオ語「目の光を与え給う」即ちかれらを造り給うた。一本一一・一。

一四 者は主なり。一四 真実によりて貧しき者を裁判く王は、その玉座永久に堅かるべし。一五 鞭と叱責とは智慧を與う、されど己が意の底に放任されたる小兒は、その母<sup>6)</sup>を辱しむ。一六 悪しき者増す時は、罪惡も亦増さん、しかし義しき者彼等の滅亡を見るべし。一七 汝の子に教えよ、さらば彼汝を樂しませ、汝の心に喜悦を与える。一八 預言<sup>7)</sup>なくならば、民滅びん、されど法を守る者は幸福なり。一九 下僕は言によりては改めしむるを得ず、そは云われし事を了れども、之に応うることを忽せにすればなり。二〇 汝語るに輕卒き人を見たりや、之を改めしむるより、まだしも愚ざに見込み。二一 己が下僕をその幼き時より劬りて養育つる者は、後に至りてその強情なるを見ん。二二 怒り易き人は争<sup>8)</sup>を起し、激し易き者は罪を犯し易し。二三 高ぶる者は後に辱しめに逢い、心の謙遜なる者は榮誉を受けん。二四 盗賊と事を共にする者は、己が靈魂を憎むなり、彼は誓を聽けども云いあらわさず。二五 人を懼る者は速かに倒れ、主に希望を置く者は高められん。二六 君侯に

も子にわがまゝをさせやすい。一七)こゝは本当の予言者についてでなく、信仰を教える者について言う。

8)百二二・二九。一り利五  
一及び士一  
七・二参照。

面謁を求むる者は多し、されど各人の審判は主より出るなり。<sup>10)</sup> 義しき者は惡しき者を憎み、惡しき者は直き道を踏む者を憎む。言を守る子は滅亡を免るべし。

## 第三十章

### アグルの教訓

一　吐きし者の子なる集めし者の言。天主共に在す人の語りし幻、彼は己が許に宿り給える天主に励まされて云えり、<sup>2)</sup> 二「我は人々の中にて最も愚なる者なり、我には人々の有てる智慧あらず。三我は智慧を学ばざれば、聖徒の知れる所を知らず。四天に昇り、また降りし者は誰ぞや、風をその手に把持したる者は誰ぞや、水を衣服に包めるが如く、束ねたる者は誰ぞや、地のすべての限界を定めたる者は誰ぞや、汝もし知るならば、その名は何、その子の名

<sup>10)</sup> 天主はすべての人に対して審判を行い給うにより、主に対する信頼は我らに勇氣を与える。

第三十章 1) 本章はヤケの子アグルの小箴言集。ヘブレオ語本には「マツサ出身」と附記あり。ヴルガタは両者の名を語義につて訳出している。—2) 作者は天主が自分に啓示を与え給うたと云う。—3) ヘブルオ語本「聖なる者、至聖なる者、天主。」

は何と云うや。④ 天主の御言は何れも火を経たり、<sup>5)</sup>そは  
かれ希望を置く者の楯なり。⑤ その御言に何言をも附加  
彼に希望を置く者の楯なり。⑥ その御言に何言をも附加

うるなかれ、恐らくは汝責められ、且虚言者と見らるべ

し。⑦ 我は汝に二つの事を願い奉れり、わが死せざる内

は之を我に拒み給うなかれ。⑧ 即ち虚しき事と虚偽の言

とを我より遠ざけ給え。赤貧をも、富をも我に与え給う

なかれ、ただ生くるに必要なる物のみを我に賜え、是

我が飽き足るや、心迷いて汝を否み、<sup>9)</sup>ノ主とは誰ぞノ

と云うが如きことなからん為、または貧窮に迫られて盜

み、わが天主の御名をよびて偽り誓うが如きことのなか

らん為なり。⑩ 僕の非をその主に告ぐるなかれ、恐ら

くは彼汝を呪いて、汝倒るるに至らん。⑪ 己が父を呪い、

己が母を祝せざる輩あり、二自ら見て潔しとなし、し

<sup>4)</sup> 天主およびその御子の本質がどういうものであるかは、誰も悟ることができない。七十人訳は「子」という語を複数にして、折角の偉大な特徴を台なしにしている。

5) 詩一一・七。一<sup>6)</sup> 中四・二。一  
二・三二。十一富に心を奪われる

と、とかく天主を忘れやすい。そして忘れるとその存在を否定したり、少くとも無神的行動をしたりするようになる。一<sup>8)</sup> 貧しいと、とかく盜みをしたり、または天主をつらい貧窮の因と見なして悪口したりし易い。一<sup>9)</sup> 一一一四節で、作者はその時代の主要な欠陥を述べようとする。

一三

一四

一五

一六

一七

一八

かもなほその穢れを洗い落されざる輩あり、一三その  
 眼高く、その眼瞼あがれる輩あり、一四困窮せる者を  
 地より、貧しき者を人々の中より、喰い尽さんとて  
 劍を歯とし、その顎の歯もて咀み碎く、<sup>10)</sup> 輩あり。  
 一五蛭<sup>11)</sup>に二人の娘<sup>12)</sup>あり、『持ち来れ、持ち来れ』  
 と云う。飽くことを知らざるもの三つあり、第四の  
 ものは決して足れりと云わす。一六即ち冥府、<sup>13)</sup>  
 石婦<sup>14)</sup>水の足らざる地。また火は決して『足れ  
 り』と云わざるなり。一七己<sup>15)</sup>が父を嘲り、己<sup>16)</sup>が生みの  
 母を蔑む眼は、<sup>17)</sup> 溪流の鴉之<sup>18)</sup>を抉り出し、雛鶯之<sup>19)</sup>  
 喰えかし。一八我に解し難き事三つ<sup>20)</sup>あり、しかして  
 第四の事は我全く之を知らず。即ち空飛ぶ鷦の道、  
 岩の上崩う蛇の道、海の中ゆく舟の道、及び青春の

10) ヘブレオ語本「その牙は刃の如し」。  
 11) ヘブレオ語「アルカ」は貪婪飽くことなしと思われていた或る怪物。

12) 快楽と貪慾。一十三) よみは漸次全人類を呑んでしまふから、飽くことを知らない。一十四) 「うまづめ」も飽くことなく子をほしがる。一十五) 生まれた時母にひどい苦しみをかけたことを忘れる子。

16) 三は完全の数。四という数を附加したのは、例がたゞ十分あるばかりでなく、溢れるほど沢山あるといいう意。この数の喻は既に七節から始まり、一五節に続く。本六・一六参照。一九一二節にある譬喻の要点は、「理解し難い」ということ。

人の道。<sup>17)</sup> 二〇 淫婦の道も亦かくの如し、かかる女は食いてその口を拭い、『我惡事をなしたことなし』と云うなり。<sup>18)</sup> 二一 地は三つのものによりて震動く、しかして第四のものには耐うる能わず。二二 即ち世を治むる奴隸、食に飽く<sup>19)</sup> 愚者<sup>20)</sup> 二三 娶らるる憎むべき女、己が女主人の後嗣となる婢女。<sup>21)</sup> 二四 地に最小さきもの四つあり、されど是等は賢き者よりも賢し。<sup>22)</sup> 二五 即ち弱き民ながら、己が為收穫の時に食物の備えをなす蟻、二六 力なき民ながら、岩の中に己が臥床を造る鬼、二七 王はなけれども皆それぞれの隊に従いて出る蝗、二八 手もて身を支え、王の館に棲む蜥蜴、是なり。二九 よく歩むもの三つあり、しかして第四のものは進みて幸あり。<sup>22)</sup> 二〇 即ち、獸の中にて最も強く、何物に逢いても恐れざる獅子、三一 腰に帶せる牡鷄<sup>23)</sup> 牡山羊、及び何者も抵抗すること能わざる王、是なり。三二 高きに上りて後、愚者たる

<sup>17)</sup> ヘブレオ語本「乙女を慕う男の途」。<sup>18)</sup> 淫婦がかように軽卒なこともわからない。—<sup>19)</sup> 栄える。

<sup>20)</sup> この四つのものの喻の要点は「堪え難い」ということ。<sup>21)</sup> 次の四つのものの喻の要点は「堪え難い」ということ。<sup>22)</sup> 次の四つのものの喻の要点は「その出現が威風堂々としている」ということ。<sup>23)</sup> 近代の解釈者は大概この言い方を軍馬を示すものと考えている

こと顯るる場合あり、蓋し、彼もし慧かりしならば、  
その口に手を当てしならんに。<sup>24)</sup> 三三 乳を出さんとて強  
く乳房を圧うる者は牛酪<sup>25)</sup> を搾り出し、激しく鼻汁を  
かむ者は血を出し、忿怒を挑発する者は争を生ず。」

### 第三十一章

貞潔、節制、慈善の勤め——賢き主婦の讃美

一 ラムエル<sup>1)</sup> 王の言。その母<sup>2)</sup> が彼に教えし幻示。

二 わが愛子よ、何を云わんか、わが胎の愛子よ、何を  
云わんか、わが願を立てて<sup>3)</sup> 得たる愛子よ、何を云わ  
んか。三 汝の財産を婦女に与うるなかれ、また汝の富  
を、王を滅ぼす為に与うるなかれ。四 ラムエルよ、王  
に与うるなかれ、王に葡萄酒を与うるなかれ、醉のあ  
る所には秘密なけばなり。五 また恐らくは、彼等飲

<sup>24)</sup> 容易に傲慢な言葉を吐かないため  
に。<sup>25)</sup> 脂肪の多い、濃い乳。

### 第三十一章 1)「天主に身を獻げた」

の義。古人はこの名をサロモンを象徴的にさす語と思つていた。かれらの説では、二節以下の語は、ペトサベーに該当することになる。しかし現代の解釈者の多くは、ラムエルが特定の一人物をさすとしている。  
2) 王太后は東国の宮中では大いに重んじられていた。<sup>3)</sup> 祈願をこめて。

まば正義を忘れ、貧しき人の子等の訴訟を無視せん。悲しめる  
 ものに強き飲料を与え、心に苦しみある者に葡萄酒を与えよ。彼  
 等は飲みて己が貧窮を忘れ、最早その悲苦を憶えざるべし。八哩  
 者<sup>4)</sup>の為、また過ぎゆく<sup>5)</sup>すべての子等の為に汝の口を開け。  
 九汝の口を開きて、義しき事を命じ、困窮れる者と貧しき者とに  
 正義を行え。一〇誰か強き女を見出すことを得んや、<sup>6)</sup>その価は、<sup>7)</sup>  
 遠く外地の果より来る物の如し。二その夫の心は之を恃む、彼は  
 得る所なきに困しむことあらじ。二三彼女はその生くる日の限り、  
 夫に善き事をなして惡しき事をなさざるべく、二三羊毛と亞麻とを  
 求め、その巧なる手もて働きたり。三四彼女は商人の船の如く、遠  
 方よりその糧を運ぶ。一五また夜の中より起きて、その家人に己が  
 得たる物を、その婢等に食料を与う。一六畑を検分て之を買ひ、己  
 が手の所得もて葡萄畑を作り、一七力もてその腰に帯し、その腕を

4) 何かの理由で権利を主張することができない者。一5) 保護を受けなければ、滅びそくな。

6) 一〇節から終りまでは、しつかりした主婦の讚美。各箴言はヘブ

レオのアルファベット文字で始まつてゐる。7) ヘブレオ語本「その価は遙かに真珠を凌ぐ」。

4) 何かの理由で権利を主張することができない者。一5) 保護を受けなければ、滅びそくな。

強くし、一八己が取引の善きことを味い見たり。その燈火は夜の間消え

8)「商人」と言

じ。一九彼女はその手を偉大なる事に伸べたり、その指は紡錘を執れり。

うに同じ。東国では長い間フエ

二〇彼女は困窮れる者にその手を開き、貧しき者にその手を伸べたり。

ニキア人とカナ

二一彼女はその一家の為に雪の冷きをも懼れじ、蓋はその家人いずれも二

アン人とが貿易を一手に握つていたから。

二二重の衣服を着たればなり。二三彼女は己が為に綴織の覆布を作れり、その

アン人とが貿易を一手に握つていたから。

二三衣服は細糸の亜麻布と紫の天鵞絨とより成る。二四その夫はその地の長老

9)ヘブレオ語本

二四等と共に門に坐する時、人に知られたり。二五彼女は細糸の亜麻布を作り

「彼女は後の日

二五て売り、帶を力ナアン人<sup>びと</sup>に付せり。二六力と美とはその衣服なり、彼女

9)ヘブレオ語本を笑う」。10)女

二六は最後の日に笑わん。二七彼女は賢くその口を開けり、その舌には寛仁

の価値は容姿の美にあるのでな

二七の法あり。二八彼女は己が家の徑を考え、無為にしてパンを食したること

く、天主を畏れて賢明に事を行

二八なし。二九その子等は起ちて彼女を至福なる者と称び、その夫も彼女を讃

う所にある。

二九えたり。二九曰く、「財富を集めたる娘は多し、されど汝はそのすべてに

三〇優れり。」と。三〇優しき姿は欺瞞なり、美しい色<sup>いろ</sup>は空に帰す。されど主

一九二〇二一二二二三二四二五二六二七二八二九三〇

三一  
を畏るる女は讃めらるべし。三一その手の得たるもの  
を之に与えよ。その所行門にて之を称えよかし。  
11)

11)聖会は本節を、聖なる主婦たちの祝日に朗読させることとしている。